一統

中村

第九十五號目要

○勸信要義……本多日生
▲救はれの唱……松尾忍水
○日蓮門下各宗比較評論（承前）……主筆
▲本誌擴張の辭及『顯本』との合一に付……
○身延山共有論……上田不新
▲折柱、秋葉純一、木信　松平五峰の詩歌……
○日蓮大聖人（承前）……岡田養叔
▲春の平日……宝田弧松
○初音……中川桐蔭
▲京都通信……白藤生
○法華經主義……白藤生
▲高等宗學院閉院式……
○七里法華法戰記（備前）……影山謙二
▲報告及廣告等……
○吾が家の安心……本立院日誓

（明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可
全三十六年三月十五日發行統一第九十五號　毎月一回十五日）

救はれの囁

松尾忍水

小夜の衣に
しめりあり
不圖眼ざむれば
雨の音

誰ぞや行燈の
かたはらに
しかとはわかねど
ひらむ者

瞳を凝し
打ち見れば
袖もて顔を
おほひけり

語るを聽けば
救はれしの仁は
囁なり

赤き縁の
縁にて
濁りに淨き
白蓮華

臺の上の
四八相
今斯かくす
姿なり

かゝりし雲の
袖とれば
疇昔のまゝの
顔せや

あな懷かしの
吾妹子と
思はず呼びし
我聲に

妹は莞爾と
打ち笑みて
かき消す如く
失くなりぬ

灯影ゆらめく
ろの下の
机の上に經半
宵に開きし
儘にして

（完）

＊＊＊＊＊＊

本誌擴張ニ付團友諸君へ披露

本誌が歩み來りしこしかたを顧みますれば、隨分と幾多の苦勞も致しましたが、さて又吾曹の皷吹が必らずや、世に利益を與へたることの夥多をも信するのであります、本誌は去る九十號に於て聊か改革を加へ、次で全國鐵道各停車場待合室備付の事を計り、多少主義發展に於て勤めたる積りですが、それにては心足りないので、今回又我同主義の「顯本」と合一を實行し、努力更に其れが發揚につとめるつもりです、其第一着として本號より紙面を廣大にし內容を豐富にして見へることに致しました、と云へ未だ理想の上からは其一分にも達しないので、這は團員諸友と共に甚だ遺憾のことであります、すれども、其不滿足の點は更に來るべき、豫期時代に於て必ず得らるべきを信じて、忍耐精勵彼處に到らんことを誓ひ且つ祈るのであります、諸友に於ても本誌發達の爲め益々盡力あらんことを至囑に堪へません。

統一團

▲▲注意▼▼

●本誌廣告

本誌は既に全國各停車場へ備付居れり

●●●●●●●●●●●●

本誌月定め購讀者へは

法の鼓を無代添付することゝせり、

（但月定講讀にして代金拂濟のお方のみ）

毎月一回發行法の鼓は至極平易の文字にして法話あり小說あり、最と可愛らしき冊子也

佛旗六金色
御寺院御幕 **調進所** 六金色價表●
唐縮緬製●

種形別	並品製	上品製	新友仙	本友仙染抜
在家用	廿二錢	廿八錢	卅五錢	五十五錢
寺院用	四十三錢	五十錢	○	一圓三十錢
同極大	七十五錢	八十八錢	○	二圓二十錢

右外別大特大最大數種●國旗本友仙染抜四十五錢
御寺院用御幕●唐縮緬紫幕●天竺木綿及五郎丸白幕
京都市油小路魚棚南
御本山御調用進所 **吳服商 高橋正意**

▲讀者諸君

「統一」の隆盛と發達を成さしめ給ふは單に購讀者諸君の爲され方一ツ也　諸君か購讀料を拂つて下さらねば「統一」は衰退の止を得ぬ次第になります、

諸君の方では月々僅かの購讀料でも、團の方ではうれが頗る多額になるわけですから、此へん御察しを願いたい、

又「統一」は前號より全國各停車場に備付の事もあり月きめ購讀者諸君には法の鼓を添付することにもなりましたから、勞々運轉の油、つまり雜誌代を早く拂ひ込んでもらいたいのであります

統一團會計部

御斷り

本號は紙面擴張等の爲に期日の遲れしを謝す……

編輯子

團告

（毎月保助金に付）

本誌全國各停車場待合室備付に對し其擧を賛し毎月保助金を申込まれし奇特家は左の如し

岡山市　久城茂太郎殿
姫路市　中村祐七殿
東京市　中原福藏殿
神戸市　齋藤榮治郎殿
吳市　木村孝殿
品川　大島良太郎殿

「統一」基礎金領收報告

福井縣坂井郡棗村石畠

一金三圓也　夏目賢齋殿

爲亡父七回忌菩提

右本誌基礎金中へ御寄附相成正に領收致候也

統一團

「統一」基礎金領收報告

岡山縣美作國眞加郡

一金五十錢　安藤來治殿

右本誌基礎金中へ御寄附相成正に領收致候也

統一團

團告

千葉縣内左の各區本誌購讀料集金の義今般左の各師へ依囑候間何卒諸師の内へ御拂込被下度願上候也

第三教區　長生郡押日來光寺　山田寛祐師
第四教區　全郡澁谷行光寺　前田日應師
第六教區　山武郡清名幸谷東光寺　草切榮玉師
第七教區　全郡御門妙善寺　飛山日甫師

他教區は追て依囑人名報告可致候

明治三十六年三月

統一團

六社同盟購讀料滯納者處分法

雜誌購讀料を滯納し遂に其支拂を果さゞるものは各社互に其姓名及事由を通告し其甚しきものは之を同盟各紙上に掲示するこゝとあるべし

明治卅五年八月二日伊豆伊東に於て之を決議す

教友雜誌　日宗新報　妙宗
日本之柱　北友雜誌　統一

『統一』『顯本』兩雜誌合同の辭

我が『統一』及び『顯本』は、俱に　聖祖門下一方の重鎭として、互に旗色を飜ひして、宗運發展教法統一の主義を唱導せり、然るに今や門下各宗派合同の機運は漸く動き、宗門前途に對する經營畫策は倍々多きを加へんとす、此時に當り、互に一方に割據して其の勢力を二分するが如きは宗家の爲めに忠實なる所以にあらず、況や異體同心水魚相思の聖訓の凱切を極むるに於てをや、是に於てか、我が『顯本』及び『統一』は、其の自ら抱持せる主義主張に於て敎國前途に對する見地に於て、毫も異なるところ無きを認め、斷然茲に『統一』『顯本』兩雜誌の合同を實行し協心戮力以て大に宗運發展敎法統一の鵬翼を伸べんことを期せり、聊か兩雜誌合同の理由を略叙して我『顯本』及び『統一』の讀者に告くること如斯矣

明治三十六年二月十五日

統一團
顯本雜誌社

今般兩雜誌合同に就ては左の各項御承知有之度

一、從來『顯本』誌上に掲載したる記事の續稿及び社友諸君より寄惠せられたる未掲載の原稿は次號改善の統一誌上に掲ぐべし

一、從來の『顯本』讀者には『統一』を送附すべし

一、一人にて『顯本』『統一』兩雜誌を購讀し、既に、顯本購讀料前金拂込の分は該金悉皆『統一』購讀料中に繰り込むべし

統一主義

勸信要義

本多日生口述
山根顯道筆受

總論

第一節　佛敎は始中終信心を最要とす

信仰は宗敎の生命なり、若し宗敎にして煩瑣なる敎義に縛せられ、汎漫たる學說に縛せられ、思索推究の裡に沒頭し、爭論葛闘の芬に彷徨して、信仰の安立を獲得せずんば、宗敎の眞價は已に逸し去れるなり、宗敎にして信念を失はゞ、月に光なく梅に香なきが如く、何の稱揚讚美する所かあらん、余は春の如き溫き信仰を愛す、余は海の如き濶き信仰を愛す、余は花の如き美しき信仰を愛す、余は月の如き光りある信仰を愛す、生盲の始めて眼あき父母等を見るよりも嬉しく、强敵に生捕られし者の許されて妻子を見るよりも喜はしき思ある、喜慶信を愛し、歡喜信を愛す、臭き如を去華經に捧げて金色の如來となるは、砂を以て金に替ゆるの思ありと云へる絶待信を景慕し、金剛信を歎美す

信仰は宗敎の生命なり、智者學匠の身となるとも　地獄に墮ちて何の詮かある　智解は畢竟信仰の筌蹄のみ前方便のみ、然れども衆旨を導かんとせば、生盲に安ずるを得ず、方風を辨へずんば　諸商を濟すこと能はじ　解學の要此に於てかあり、若し解に拘はり學に泥みて　至誠淳善の信なくんば、是れ全く宗學の始終に闇きなり、寧ろ學びざるに若ざるなり、聖祖立正觀の一鈔、眞に宗學の奧藏を傾倒露出せるもの、先師元政識博く解深し、蓋し止觀一部の妙旨を解するに於て、宗內古今師に超ゆるものなし、然かも師立正觀鈔を拜する每に、感泣禁ずるなく、可三信得一不一可二識得一の一語を遺して、宗學の歸趣を明にす　眞に千世を照すの格言なり

佛敎に法行信行の二大別あるは　各宗共に認むる所なり、蓋し法行も亦信心の基礎なくんば、其行願を成辨する能はず、而して最終妙覺の大悟は、復全く信念に賴るの外、之を證得するの道あることなし、佛敎は大海の如く絶待無限の法門なり、豈に信念に賴らざるを得んや、滿十方舍利弗の如くなる者　共に佛の智慧を測るとも、之を知ること能はず、汝舍利弗信を以て入ることを得たり、己が智分にあらずとは、法華經迹門に說く所ならずや、佛敎は法門不思議なり　佛智不思議なり、汝等當に如來の誠諦の語を信解すべし、復大衆に告く、汝等當に如來の誠諦の語を信解すべし　又復諸の大衆に告く、汝等當に如來の誠諦の語を信解すべしと三誡し、

次に我等當に佛語を信受し上るべしと三請して、說き給へる甚深の法語は、嗚何に物ぞ、聽き得たる無上の敎味は、抑も何物ぞ、乃ち是れ「如來秘密神通之力」と云へる無始無作の本佛の妙体妙用にあらずや、如來鍵諦の甚深無上の法門は實にこの「如來秘密神通之力」の八字なり、三世盡十方應現の形聲二益の源流は　北處に顯はれたり、縱說橫說無盡の法門は、うの依止處を得たり、幾千萬卷の經論釋疏に亘り數百千歲の年處に經て、敷揚し宣傳せられたる佛敎の敎本は、此處に歸宗せられたり、現時學界に將た敎界に喧々論道せられ未だ其歸趣を得ざる人格實在論の根本義は、此處に築かれたり、涅槃論實相論の究竟旨致は、此處に至りて終を告げたり、本地難思の境智冥合の妙法は、此處にうの法体を明し、本地難思の境智冥合の無作の本佛は、此處にうの本体を示されたり、佛敎實体論の最高敎義たる事一念三千論は、此處にうの終を告げ、佛敎緣起論の最眞妙談たる佛界緣起論は此處にうの局を結べり、佛說かずんば彌勒尙昏暗し、拂迹顯本せざれば、眞の一念三千も顯はれず、壽量品顯はれずんば爾前迹門は六道を出でず、何ぞ九界を出んや、眞實の得道は壽量の一品を聞きし時也、是れ則ち佛敎は最初の發心は信仰に在り、中間の行持亦信仰に在るのみならず、最終の得脫證悟、總べて信得にあるを示せるにあらずして何ぞ、

詮する所佛敎徒の眞正なる目的は、最後の絕待無限の證悟得脫にあり、而してこの最終目的は信念に賴るの外なきを知らば、信念受持の緊要たること言を待たずして領會せらるべきなり、聖祖が四信五品抄に惠亦堪へざれば信を以て惠に代ゆと說けるは、畢意機根に約して立論し玉ふが故に　智惠行に堪へざれば之に代ゆるに信を以てするものにして、若し智惠行に堪ゆるものには、信念を要せざるかの如き觀あるも、此は未だ信念の秘奧を示さゞるなり、今一段進で信念の妙旨を示し玉へるは、立正觀抄の本地難思の境智の妙法は、迹佛等の思慮に及はず、何に況んや菩薩凡夫をや垂訓是なり、本佛の加被を蒙むりて、證語得脫すべきは、是れ宇宙の實相にして、內薰自力のみに依りては、最終の證語を得る能はず恰かも子の親に於けるか如く病者の醫師に於けるが如く　他の加被攝護に信賴せずんば、斷じて證悟得脫の途あることなし、壽量顯本の大切なるは之が爲めなり　若しこの顯本の妙旨に依りて、無始無作の本佛を光顯せずんば、信念の依止處なく、隨て證語得脫の途なきなり、さればこの顯本の妙旨に依りて、本有無作の本佛を光顯して、本有無作の慈悲即ち每自の大悲願より回向せられたる、我等の信念なりと領知せずんば、信行の旨致を失却すべし、聖祖が我等衆生は五百塵點劫より已來、敎主釋尊の愛子なり、不孝の失に依りて今に覺知せずと誡告せられたるも、又日什正師が　壽量品を讀して「宣ヘテ無作三身之應用ヲ顯ハス塵點久遠之大悲」と謂へるも義決

に「經ニ每自ノ下ノ一行ハ頌ニ三世ノ益ノ不虛ナ若見ハ此文ノ能ク知ラン如來從ニ久遠ニ來常念ショノ衆生上、我等カ得レタルモ聞クヲ無シ不ルハ酬ヒ於釋迦大師ノ每自ノ念願ニ。當レ知得レ聞クヲ得ル「佛ヲ不レ久シカラ矣」と說けるも、又聖祖が佛の御魂の入り替らせ給はねば唱へ難き題目なりと歎美し玉へるも、皆是れ信念の秘處妙處たるなり、聖祖門下の僧俗共に眷々服膺すべき最要の敎旨なり

日什正師の毅然として異流の紛乱を叱正し玉へるは、實に受持分絕の一事に外ならず、而して受持とは信念なり、之に由て之を觀れば、日什正師の主唱は、彼の煩瑣なる學見にあらず、又區々たる章句の葛藤にもあらず、全く至誠淳善の信仰を喚起し、衆生成佛の要路を開くにあるは明なり、故に代々の先師信行の要道を說くこと至れり盡せり、日乘上人の信行要道義に曰く、「約ニ熟脫ノ機ニ雖レ分ト信法ニ、最初ノ發心ハ並ニ是レ由信ニ、何ニ況ヤ今時之人ハ運處ニ濁末ニ根性微薄ナリ、鈍ヵ中ノ最鈍ナリ、若シ非ニ信行ニ何ヵ以ヲ爲ン行ヵ」と、日受上人の如實事觀錄に曰く、「若無クレハ信念ニ則ヵ口業身業徒ニ行スト之ヲ耳」と、その旨致知るべきのみ、異流の徒觀念助行の說を創めたるは、畢竟宗學に闇きの餘弊なり、斷了は徹頭徹尾信念を決定せしむる前方便に過きず、

斯く論し來れば聖祖の御所立は、信念成佛を第一要義となすこと明瞭なり、されば之を世人に宣傳するに當りては、先つ自已が熱誠を捧げてこの信念を確立し、その信念の薰發を以て、他に感應せしひべし、只目に書を睦耳に說を聽くのみにして、自己の精神上に溶化し把住せられざる、煩瑣なる學說冷灰なる敎義を、喝々喃々するとも、決して感化の効力を生ずべからず、自信敎人信は敎家の秘訣なり、聖祖の我も信じ人をも勸めんとの誡告を忘るゝ勿れ、彼の禪門の徒言語文字に着せず、先つ自已の心に之を尋ねて、精神の修養を努むるが如き、又彼の眞宗の安心領解を大切にするが如き、又彼の基督敎徒の大衆傳道に際して、精神の準備を神に祈れる如き他山の石以て我玉を磨くに足れり、願くば敎導感化の事に從ふの士は、廣く長短を各宗敎に鑑み、以て我甚深無上の信念成佛の敎旨を宣傳し、佛祖の宏範を翼贊せられんことを

第貳節　主義と應用

自已の確信せる主義　如何に正明にして如何に堅實なるも、之を天下に應用し、敎導感化の効果を奏し、以て現世と來世との二大利潤を起さんと欲せば、この主義と應用との關係に心を潛めて、うの運用を誤る莫きを期せずんばあらず、由來宗敎家か頑迷不靈の誹を受くる所以は、全くこの主義と應用とに就て、考察圓熟せざるの致す所なり、殊に聖祖折伏の立敎に就て、我宗には甚しき頑陋なる頭腦多きの感あり、是れ畢竟法華折伏の眞意義を領得せざるの迷想陋見に外ならず、法華の折伏は權門の理を破するに在り、各宗の迷謬を叱正するにあり、決して所由なき爭鬪を好むべきものにあらざるは

言ふまでもなく、折伏行化の修養としては、必ず慈悲忍耐無私包容等の美德を積まずんばあらず、佛敎の宣傳に在りては佛陀已來四悉檀の規定、嚴として犯すべきにあらず、四悉檀とは主義と應用との關係に外ならず、この主義と應用とを全ふして、始めて偏く衆生に法益を施すことを得るが故に、悉檀即ち徧施と稱するにあらずや、若し主義を堅持すると稱して、應用を忽且に付するあらば、是れ眞に恐るべく悲むべきの大魔見と知るべし、

四悉檀
- (1) 世界悉檀
- (2) 爲人悉檀 ……應用……方便惠
- (3) 對治悉檀
- (4) 第一義悉檀……主義……眞實惠

この圖に示すが如く第一義悉檀は主義なり實惠なり、他の三悉檀は應用なり方便惠なり、而して聖祖折伏の行化の如き、全くこの主義と應用とに於て、四悉運用の秘妙に達し玉へるものにして、深き考察の結果に依り、長き試練の工夫を經て發表し玉へる一大化導たるなり、折伏立敎の宗門の性格は移動すべきにあらざるも、其折伏の節刀を運用するに於ては時代發展の敵論に對して之を懲治せずんばあらず、既に過去の死せる敎義學見に對して論駁を試むるも、生氣あり活氣ある時代の敵論に對する用意なくんば、是れ斷じて聖祖門下の眞獅子兒たるを得ず、敎義學見は駁々乎として進みつゝあるその現代なれば、その應用に於ても尤も苦心練僧を要す、聖祖一化の言動子細に文に遺徵するに、殺活進退の自在なる、眞に二惠の應用其極に達し、四悉の運轉正しく神に迫る、今や我日本は聖祖當年の日本にあらず、敎界に學界に我第一義の妙旨を發揚宣傳せんとするに當りては、尤も應用の上に苦心の存するものにして、主義信念は固より金剛のそれの如く堅牢拔くべからずと雖ども、未だうの第一義に歸順せざる、幾千萬の靈をして、この法雨に浴せしめんとするには、一大警覺を要す、由來東洋佛敎の活氣なく實効なきは、全く主義と應用との關係に就て、一大迷想を有し、又旦つ方便惠と實惠との關係を誤り、二惠の間に適當なる連絡なく、四悉の運轉全く止まれるの致す所なり、若しこの迷夢を打破するなくんば、正法正義の發揚は望むべからず、眞乎護法の健兒解せりや否や、

今我疾苦皆由過去　日玉
さきの世の己が作りし其さまの描りしものと知れば魂つかし
今生修爲報在將來　同
後の世の種とし知らばいかでそも驗しそ見べれうらみやはする

各面評論

日運門下 各派比較評論（承前）

各論

第一節　五人所破抄を評す

各派の比較に就ては、先つ歷史的にうの序を逐ふて、之を叙述せんと欲す、大聖人の滅後六老僧の間に衝突を起したりと云ふもの、是れ實に統一主義の門下に於ける、忌むべき派別の現象を生じたる徵證となす、然れども此の六老僧間の衝突は、果して彼等門下法孫の云ふが如き、學見と事象とを存せしか否かは分明ならず、日什正師は大聖人の入滅を去る、僅かに一百年に充たざるの時に於て、この派別の主張を評し、彼此の論點明確ならずと謂へり、唯當時の法孫等の主張に至りては、彼此偏固の識見に走り、經判の解釋狹劣に陷りたるの弊あるを認むるに過ぎず、六老僧に對しては是非申し難しと仰せられたり、是れ眞に公平無私の批判にあらずや、されば今日に至り六百有餘の歲月を閱みし、相互の主張技より技に移り末より末を逐ふて、紛々擾々たるの狀態なれば、今日より大聖人入滅當時の狀況に就て、歷史の事實に依り、彼此の主張を明にするは、尤も困難のことにして、什師の指導に依れば、六老僧間の議論の實證は得がたく、是非の斷定を下すべからずと決せられたり、是れ我等の奉ずべき指針にして亦我等の中心より其識量濶大にして且公明なるに敬服して措かざる所なり、されば派別の起原に向つて、日興と五老との主張を比較研究せんと欲するも確固たる憑據なく、この六老間の派別の評論は、六老已後の法孫間の主張を推究するより外なきなり、然り而して六老僧の名に托して作製せられたる數多の古書は、大低彼の病的信念の假托僞造の產物に外ならざれば、此等の古書に依りて彼此の主張を撿せんとするは、尤も危險なる研究法たるを知るべし、然れども此等の古書は、少くとも大聖人滅後一百年間に作製せられたるものにして、之に由て彼等法孫の門に主張せられ執持せられたる見解を窺ふを得んか、余は先の六老間の衝突に關し、日興の名に假託して作製せられたる五人所破抄に就て、之を評論せんとす、五人所破抄に記する所を見るに、衝突の論目左の七點にあり、

（1）五人は台家に同じて皆天台沙門の名を冠せり、日興は之に反對して日運特殊の敎義と名稱とを用ゆと云ふにあり

この爭議は、六老僧が武家に向つて、奏狀を捧くるの事より起れりと云ふ、うの奏狀中左の文言あり

先師日運忝クモ法華ノ行者タリ　專ラ佛果ノ眞道ヲ顯シ、

天台ノ餘流ヲ汲ヲ毘盧ノ精研ヲ盡ス　天台沙門　日昭

前判ノ權教ヲ閣キ後判ノ實教ヲ弘通セシム　天台沙門　日朗

垣武聖代ノ古風ヲ扇キ傳教大師ノ餘流ヲ汲ヲ立正安國論ニ准シ法華一乘ヲ崇メラル　天台沙門　日向日頂

日昭日朗等の上人はうの奏狀の文意權實に止まり本化獨得の妙處を發揮せず、又うの名稱の上に天台沙門と冠す、これ聖祖出興の大義を滅沒するものなりと云ふにあり而して日興師の奏狀は如何

日蓮聖人ハ忝クモ上行菩薩ノ再誕ニシテ本門弘通ノ大權ナリ、乃至今末法ニ入リテハ上行出現ノ境本門流布ノ時ナリ正像既ニ過リ何ソ爾前迹門ヲ以テ强テ御歸依アルベケンヤ乃至本迹既ニ水火ヲ隔ツ時機又天地ノ如シ、何ゾ地涌ノ菩薩ヲ指シテ苟モ天台ノ末弟ト稱センヤ　日興

斯くの如く日興獨り本化獨得の教義を唱へ、本門迹門の別を述べ、天台沙門の名を冠せずと云ふにあり、第二の爭點は如何

(2)五人は本化獨立の一宗を認めず又漢文を貴み祖書を改作せんと云ひ日興は之に反對したりと云ふにあり

五人の曰く、和漢兩朝の章疏を披て本迹二門の元意を探ぐるに、判教は玄文に盡き、弘通は殘る所なし、何ぞ天台一宗の外に胸臆の異義を構へんや、抽き哉高尊の台嶺を褊みして偏鄙の富士を崇めんや、明靜の止觀を閣て假名の消息に執せんや、乃至若し聖人の製作と號して後代に傳へんと欲せば、宜しく卑賤の倭言を改めて漢字を用ゆべしと

日興之を駁して曰く、過八恒沙ノ競望を止めて不須汝等護持此經と示し、地涌千界の菩薩を召し如來一切所有之法を授く云云と、以て知るべし日興は本化獨得の一宗を光揚せんと云ふにあり、又倭文のことに關しては左の如く主張せり、「梵漢の兩字扶桑の一點、時に依り機に隨ふて互に優劣なしと雖とも、倩ら上聖被下の善巧を思ふに、殆ど天竺震旦の方便に超へたり、何ぞ傾國の風俗を蔑如して必しも漢家の水露を崇重せんや、唯西天の佛法東漸の時、既に梵音を翻して倭漢に傳ふるが如く、本朝の聖語廣宣の日は、又假名を譯して梵震に通ずべし、遠沾の翻譯は爭論に及はず、雅意の改轉は獨り悲哀を懷くものなりと、其主張尤も明白なるを見る、第三の爭點は如何

(3)五人は隨身佛の釋尊を本尊に用ゐべしと云ひ日興は之に反對したりと云ふにあり

弘長年間聖祖伊豆伊東に配流の日、伊東朝高より捧げたる立像釋迦佛一体あり、五人はこの隨身佛を崇敬して本尊となすの意あり、日興之を駁して曰く諸佛の莊嚴同じと雖とも印契

に依て異を辨ず、如來の本迹は測り難し眷屬を以て此を知る所以は何ん、小乘三乘の教主は迦葉阿難を脇士となす、伽耶始成の迹佛は普賢文殊左右に在り、此外一体の形像は豈釋迦の應身にあらずや、凡そ圓頓の學者廣く大綱を存し網目を事とせず、倩ら聖人出世の本懷を尋ぬるに、源と權實已過の化導を改めて上行所傳の乘戒を弘めんが爲なり、圖する所の本尊は、又正像二千年の間一閻浮提の内未曾有の大曼陀羅なり今の時に當ては迹化の教主既に無益なり、況や哆哆婆和の拙佛をや、次に隨身佛所持の俗難は、唯此れ繼子一且の寵愛月を待つ片時の螢光か、執するもの尚强て歸依を致さんと欲せば、須く四菩薩を加ふべし、敢て一佛を用ゐる勿れと、うの所論後世の興門の徒が、像佛墮獄の見計の如きは此文中にありて認むるなし、後人次第に加層し添增したるの見計たるを見るべし、第四の爭點は如何

(4)日興獨り神無の僻見を立つと云ひ、五人之に反對せりと云ふにあり

日興辨して曰く、我朝は神明和光の塵剎佛陀利生の化境なり然りと雖とも今末法に入りて二百餘年、御歸依の法は爾前迹門なり、誹謗の國を棄て捨るの條、經論の明文先師の勸ふる所なり、何ぞ善神聖人の誓願に背き、新に惡鬼亂入の社壇に詣でんや、但し本門流宣の代垂迹還住の時は、最も上下を撰み鎭守を定むべしと云ふにあり、第五の爭點は如何

(5)五人は如法經一日經を許し、日興は之を禁ずと云ふにあり

日興曰く、如法一日の兩經は法華の眞文たりと雖とも、正像傳移の往古は平等攝受の修行なり、今末法の世を迎へて折伏の相を論ずるには、一部の讀誦を專にせず但五字の題目を唱ふ、三類の强敵を受くると雖とも諸師の邪義を攻むべきもの歟、是れ則ち勸持不輕の明文上行弘通の現證なり、何ぞ必ず折伏の時攝受の行を修すべけんや、但し四悉の廣立二門の取捨、宜しく時機を護るべし、敢て偏執すること勿れと云へり

第六の爭點は如何

(6)五人は戒に就て迹門圓頓戒の持捨分明ならず、日興は斷然之を捨つと云ふにあり

これは受戒は叡山に登りて受くべしと云ひ、否別に登山の要なしと云ひ、迹門圓頓の受戒に就て五人の所見確定せざりしより日興之を駁して云く、波羅提木叉の用否中間機に隨ひ持破凡聖あり、爾前迹門の尸羅を論ずれば一向に制禁すべし法華本門の大戒に於ては、何ぞ又依用せざらんや、但し本門の戒体委細の教釋は、面を以て決すべしと、第七の爭點は如何

(7)五人曰く日興は先師の墓に詣でず先師違背の罪人なりと云へる問題是なり

五人は曰く日蓮聖人遺誡あり、滅後輪番を以て交代して墓所

に奉侍すべしと、然るに日興は身延の地頭波木井氏と不和を生し、慕參せず、甚た以て不當なりとて大に之を非難せり、日興辨じて曰く、御廟の參否を論せは、汝等碎身の舍利を信すべし、何ぞ法華の持者と號せんや、迷暗の尤も甚しき之に准じて知るべしと、

己上列記するが如く　五人所破抄に記する所の爭點は、七八點に過きす、而して此抄の終末に天目上人との爭點を附記せり、今之を紹介せん

天目曰く富士山は宜しと雖ども、又過失あり、迹門を破しながら方便品を讀むは、己に自語相違なり、信受すべきに足らす、若し所破の爲と云はゝ阿彌陀經をも讀むべしと、日興辨して曰く、方便品を讀むに二義あり、一は所破の爲め、二は文證を借る也、法門の破立に至りては、當山に詣てゝ宗學をなし給仕を致すべしと、其語窮するものあるが如し

（斯稿次續）

身延山共有論

千早なる神も惠を垂れ天下りまゝしす身延山は、げに大日蓮門下八敎團の僧侶信徒が、多大なる崇敎の情を捧ぐる一大靈跡也

然り身延山は一大靈跡也、我大日蓮か文永十一年の夏、斷然鎌倉を去つて遠く延山の奥深く草庵を結び、最後の宗敎的生活に入り給ふや、此時を以て延山は地理的に歷史的に其名を日本に知られたるに止まらすして、更に新に宗敎的に知らるゝに到りし也、即ち大日蓮自らも延山を以て天竺の靈鷲山なり、支那の天台山なりと讃歎し玉ひしにあらすや、而して更に吾人の記憶すべきは、大日蓮の宗敎觀は其佐渡に於けるよりも、延山に入りては、尙一層の發展を來せる事是なり、ろは御書の年代的研究に隨へば自ら明瞭なり、

斯の如き一大靈跡か、從來八敎團の敎理と信仰との紛糾錯雜よりして、當然拂ふべき敬禮を拂はす、異端と罵り、邪宗と貶し、其甚しきに到つては　煩瑣なる敎義論よりして、延山無間論をさへ生むに到りしは、今にして此を思へば豈慨歎すべき事にあらすや、勿論延山に於て他の厭ふべき儀式勸請の存するは、嚴格なる敎理の立場より見れば、當然改むべきなれども、延山夫自身の主觀性より見れば、御本尊の御前に合掌禮拜する者にして、豈多大の敬禮を拂はすして可ならんや、

昨明治三十五年に於ける宗團の活動は、端しなくも統一問題の趨勢に多大なる勢力を與へ日蓮宗と顯本法華宗との合同論は、正に事實となりて近き將來に於て現れんとす、此時に當てや、日蓮宗と顯本宗華宗との僧侶信徒たるもの、互ひに區々小法我を去つて、公明正大なる見地に住し、此喜ふべき

現象を歡迎せざる可らす、吾人は此意味に於て延山問題を提供し、敢て日蓮宗諸氏の一顧を乞はんと欲する也、

今や我神聖なる延山は日蓮宗の宗制の下に統治せらるゝと雖も、是實に歷史的因緣に依りて然るにして、他の大なる八敎團全躰の宗敎的感情と、敎理的統一の地盤の下に統治せらるゝにあらす、こはやがて日蓮宗諸氏が、統一問題の趨勢が尤も急なるの時に當つて、衷心喜ばるゝ事に非すして、却て忌彈せらるゝ事なるべし、而も同時に八敎團の僧侶信徒に於ても、全一の意思に出づるは確かも也、既に然り、日蓮宗の諸氏にして然りとすれば、此際大に公明正大なる意思の下に、延山の統治權を其日蓮宗てふ小なる宗團より解き、之を八敎團の共同統治權の下に屬せしむるに到らば、延山の敎權と宗威とは眞に强大を來たさむや必せり、何となれば小なる區域より大なる區域に轉し、薄き根底より厚き根底を有するに到れば也、

且夫八敎團の模範本山としても、延山は誠に恰好の本山也之を歷史的に見るも、全宗團の宗敎的感情は相携へて延山に向て走る也、延山は世界に於けるヒマラヤ山也、他の晴嶺峯たる小宗團は、皆朝宗せざるなし　然り朝宗せざる可らざる也、延山夫自身か先天的主觀的の性質を呈露して純粹なる敎理と信仰とを開發せば、漠範本山として强大なる位置を占め、全宗團の宗敎的感情を滿足せしめ、敎權と安心との之れ二つながら宗團的勢力の下に眞に强大を來すべき也、

今や日蓮宗と顯本法華宗との合同問題は、宗團統一問題の一部を實行せんとせるもの、若夫日蓮宗の諸氏にして公明正大なる意思の下に、我大日蓮の世界大の思想に同化して、此合同を遂行し、一歩進んで、延山の位置と信用と財產と敎理と信仰とを八敎團の頭上に投げかけ、全宗團の大日蓮に對する宗敎的感情を統一するの勇氣あらば、是實に宗團の慶事にして　聯か以て大日蓮か世界大の思想に貢献する處ありといふて可ならむ也、

吾人が唱導に係る統一問題の趨勢は、今や正に全宗團の根底を衝き、氣概あり覇氣ある志士は、一道の靈火を點して起てり、而して其敎理論に於ては哲理的系統の研究に入り、其信仰論に於ては道德的系統の研究に入り、而も敎理と信仰との統一的生命は是を宗敎的に求め、以て益々大日蓮の宗敎を弘く世界に傳へんとす、斯の如き宗敎論の態度は、やがて時代思想の反影にして、古來紛糾錯雜を極めたりし全宗團の敎義も、或は快刀亂麻を斷つの壯擧に接せむ、否現に吾人は接しつゝあるにあらすや、然り如斯趨勢に際したる吾人は、延山に對する頑迷偏狹なる思想を脫却せざる可らす尠くとも延山無間論の重は脫却せざる可らす、是眞に統一を愛し、全時に亦公明正大なる感情を愛すれば也、

あゝ吾人が宗敎的新生活に入るの時は、延山共有の時に始

まらざる可らず、今の時に區々小宗團の蠢動を許すべき時代にあらず、其財政と信用とは打て一團となし、帝國主義的の布敎に從事せざる可らず、其信仰と敎理とは相俟つて世界宗敎史上の一大炬火たらざる可らず、吾人は如上の意義に於て切に統一問題の趨勢に鑑み、延山の歷史を尋ね、其延山に對する古來の病的思想を排除し、之を日蓮宗諸氏の公明正大なる思想に訴へ、更に猛然たる一大勇氣を呼び起さむとするもの也（不新）

宗敎文學

日蓮大聖人（第五回）

「顯本」第四號より續く

佛城　關田養叔　講演

日蓮大聖人の御傳記を講じて『顯本』へ第四回まで載せましたが、この度、兩雜誌合同することになりましたから、これより本誌に載せるのですが、『顯本』を讀まない方の爲めに、これまで『顯本』に載せました起實の大体を左に記して、第五回への連續が解る樣にいたします

日蓮大聖人は、御父を貫名次郎重忠と申しまして、其の先祖は天津兒屋根尊の神裔たる大織冠藤原鎌足公より出たのであります、この重忠は、遠江國貫名の城主でありましたのですが、北條時政の爲めに無失の罪を蒙りまして、安房國長狹郡東條市河の鄕小港といふ處へ流罪になりました、そこで重忠はこの小港に卜居いて漁夫となり、奮い親鄕つゝきなる下總國路野邊の鄕士大野吉清の女　梅菊といふを妻に娶りました、この夫婦の間に、貞應元年壬午の二月十六日を以て生れたのが實に日蓮大聖人である、幼名を善日麿と申しました、神性非常に利發であつたので、夫婦相談の上「かゝる賢い子を出家に致し名僧知識ともなつたならば先祖代々の菩提の爲めにもなり亦斯く零落たる父母の名も顯れ貴き系圖を持つた貫名家の譽れにもならふ」と云ふので、年十二の時に、この小湊から僅か距つたる清澄寺の住僧、道善密師の御弟子に致して、名を藥王麿と改めました、これが天福元年五月十二日のことである……

＊　＊　＊　＊　＊　＊

古昔の人の歌に『世の中に思ひやれども子を戀ふる思ひにまさる思ひなきかな』とありますが、母親の海菊は我が子の善日麿を清澄の山に登らせまして、

清澄寺も、何となく海山を隔てた樣な心持が致しまして、時々御寺の方を眺めては『今頃は歷は何をして居るであらふ……手習でも致して居るかしらん……有り難い御經文でも敎はつて居るであらふか……夫れとも數多ある學問修行の僧達に手荒な事でもされはしまいか……若しや亦いろ〳〵と窘められて寂い山寺に父母を戀しがつて泣てゝも居るのではないか……』と種々に思ひ案じまして何とぞ可愛い我が子の顏を見たいものと幾度も我胸にあまりて言ひ出しましたが、夫の次郎重忠は男だけに『苟も我が子を一だび出家せしめたる上は、其の樣な未練なことを言ふものでない、却て佛道修行の障碍となるから……』と誡めた位であつた、然し梅菊は窄き婦女の心に溢るばかりの子を思ふの情は、遂に抑へ兼ねまして夫重忠に其の趣を話しまして果物や菓子などを携へ、其の外袷肌衣などの着類まで整へて清澄寺の方へ向ふて道を急ぎまする、

ところが此の山は、女人禁制と申して女人は山に登ることを許さないといふことに成つて居ります、梅菊は山を登ること僅にして『思へば女人といふものは悲ひものだ、此の山に登ることが出來ない……』としばらくの間涙にくれて居りましたが、幸ひ向ふの方から枯れ木の踈朶を背擔ひましたる一人の寺僕が山路を歸り行くのを見かけまして、此者を呼びとめ『此の山の諸佛坊といふに御弟子となつて居りまする藥王に、母が尋ねて參つたから、疾に來る樣にと御傳言下さる樣に……』と傳言を賴みました。

伴の男は間も無く坊に歸り云云と藥王丸に告ました、藥王は『母にも似合はないことを仰せられる……女人禁制の此の山に出家なしたる麿を尋ね給ふは……却つて遇はない方が……』と思ひ返しましたが、恩愛深き慈母をば、逢はずに此まゝ歸したならば、母上の嘆きも如何ならん不孝の罪も深いであらふと御師匠道善に暇を願ひまして、早速寺門を出でゝ御母樣に遭ひまする……

母の梅菊は我が子を見るより走り倚り、藥王麿の手を取りまして『能く健全で』と言ひ出す語よりも先たつものは喜びの涙で御座います、藥王麿は母に叮寧に挨拶を致しまして『麿も御父上と同伴に此の山に入り、初めの頃は、さすがに我が里の戀しく父母のことなどを思ひだして悲しくなりましたが、其後御師匠樣の情深き惠により書を讀み經文』を習ひ佛道の敎を駒め、今では悲ひの憂ひのと申すことも無くなりまして天空海濶いたします、凡う人間の一生といふものは、貴いものも賤いものも、一たび生れては死ぬるといふことを免かるゝことの出來ない夢の世の中、如何に榮耀榮華を盡しても僅かに十年か六十年、思へば風の前の燈より脆きもの、此の迷いの理りを知らずして、空しく生涯を過ごして終ふたならば、生れ死にかわり、車の輪の廻るが如く、六道の巷に

苦しむものである、されば佛法の敎へに功德を積み現世は安穩に後の世は佛陀の位に昇る樣に心掛けねばならない、麿も頓て黑髮を剃り落し、佛の御弟子の數に入り三寶國土の恩を報し一切衆生を導き助ける身とも成りましたならば、先づ父母を救ひ申しませう、御經文にも世の中に四つの恩のある中に、母母の恩が第一であると佛も定め給ひたることであります、未來永々父母の御側を去らぬ大緣を結ばする……

……今は佛道修行の途中なるに御母樣のかくも歎けき御心配下さつては、却つて麿が菩提の障て御座います、まして此の寺は女人禁制の山なればと、母親の方では、まだ子供だと思つて居りました樂王麿が思ひがけなくも其擧動と云ひ談しぶりといひ、太層に成人らしくなりまして、喩すべき子に曉されて母梅菊の嬉し泪に胸もふさがるばかりで御座いますが、思へばまた「女人の身には如何なる罪わつて此の山に登ることの出來ないのであらふか」と歎息まして泣く〳〵我家に歸ります、

此の梅菊が涙を注ぎました石をば、涕沃石と唱へて今に清滝寺の山路に殘つて居りまして此の寺へ參詣をいたしまする人々は、昔のことを思ひ出し覺ゑず涙をこぼす樣な譯で御座ります、

女人禁制といふことは、能く眞言宗や其他の宗旨です申ことであります、これは女といふものは不淨の身で罪が深いから佛法の山寺には登れないと云ふのですが、然し此の女人禁制などといふことは男でも女でも擇なく惡く救けねばならない所の眞の佛法からいへば、甚だ道理に背いた不都合な譯で、法華宗では決して女人禁制などといふことは申しませんで、一体眞言宗や淨土宗や其の他の宗旨の經文は、女人は佛に成れないと嫌ふのですが、法華經では女人でも惡人でも皆經力に依つて成佛が出來ると申します、此處が法華宗の諸宗に勝れた所であります、

初音

馬車馬　中川桐蔭

「是動物虐待防止會員」

昔はさぞな一度は
きゝす妻戀ふ花の野の
牧場の草に打臥して
童か翫む笛の音に
暮れゆく夕情みつる
うの面影や今いかに
三日月淡き柳かげ

蝙蝠低く迷ひよる
里の小川に浴して
吾作か唄ふ一ふしに
疲れも知らで歸りつる
汝が姿や今いかに

峯の嵐に驚きては
紅葉乱るゝつゝらをり
小荷駄に輕き鈴の音の
霧の彼方へうすれゆく
うの面影や今いかに

霞たばしる曉を
蘆のふすまに寢もやらで
長き鬢ふるはせつ
羽目板蹴つて勇みたる
汝が姿や今いかに

幸ある過去を追懷の
恨多かる今の身や
空ゆく雲に身をよする
鳥にも翼あるものを

なぜ汝が身には自由なき
同じ自然の手に出でゝ
八重にからまる絆より
奇しく解けぬは運命かな

涙ある人聞きもせよ
問情ある人出でも見よ
北風寒き霜の朝
かける街のゆきかへり
愁ぞながき嘶きの
何に乱るゝ足なみや
夢ならすして身につらき
呵責の鞭のふるゝとき
はゝゑむ叡者はとかでわれ
口に法とく聖まで
窓に入與のさま見るも
眉のひろみにうれと知る
隣み深き人ありや
情ある人あゝありや

＊　＊　＊　＊　＊

鑛毒地をよきりけるときよめる

其一

ふくめど出ぬ乳に飢ゑて
神にも似たるをさな兒の
うるむ瞳ひかりなく
夢にも笑める唇は
かなしき思に閉されて
甘き香りを慕ひよる
探る其手の細きかな
幸のうすきは怨まじな
神よ情ぞ飢ゑし子に
味よき雫ふくませて
よしや歡喜はきかずとも
せめてねむりの安きまで

其二

水は一つの色なから
漁る河に小魚なく
さゝやく流怨恨あり
土灰色に草黄なる

耕さん野は毒みちて
案山子になすむ鳥もなし
誰ぞや夕の雲仰ぎ
白き鬢髮ゆるがせて
後姿のとつおいつ

* * * * *

筆すさび

桐陰

○

そむけたる頭巾の色は樽わつみさても似し人京の物旅
道羽子をさりげなく見る姉の君去年にくらべて面わ淋しき
酵ざめを京へ二里なる嵯峨出でて月に絶れば春の夜更けぬ
父上の白髮目にたつ今年まだ悔ある我の業まだならず
迷ひよる復せし小犬に餌をくれてすゝろ　む雪の夕暮

折骨

○

なりくは書よむひまに手かさりて君が好みの寒巵をへてよ
これよりは紅葉折りて叫はんか渡瀬河の流すひまで

雪の句

秋葉純一

雪ふつて箕もかさりや旅衣
雪ふりて酒屋の道も汚れけり
朝茶のむ時刻遅るゝ雪見かな
已が儘の人に見せたし雪の竹
降り落す振は持たねそ松の雪
物雪や犬の子遊ふ奥の間

折りにふれて　　秋葉純一

ふりしきる雪に寒さも勝り來て
　　眺めもあへぬ賤か山里

わはら家の軒場にうつる月影に
　　文讀む身こそ樂しかりけり

所感　　於品川大學林　木信

末濁る流に身をは墨ぞめの
　　袖に蓮のこゝろ包まん

山居早春　　針間　紫山松平五峯

寒流有響雪晴初、　境靜幽齋意自舒、　盡日山中無客過、
梅花香裏讀仙書、

法樹連珠

白藤

○法華經を讀まば、宜く法華經的の人物となるべし、而して法華經を實行す、是則ち法華經主義なり、然れども法華經の奴隷となる勿れ、如何となれば、是の如きは法華經を讀みろこねたるものにして、眞の法華經主義にあらざればなり

○日蓮上人は法華經主義を奉じたる人なり、法華經の奴隷とならずして、法華經を自由自在に應用したるなり、吾人之を日蓮魂と云ふ、

○法華經を信じ、法華經の主義を行ふ者、法華經の奴隷と云ふ支障なきにあらずや、子の論矛盾せりと人謂はんか、

○然れども聽け、今日の所謂法華經信者、殆と數百年以前の舊套にして、明治文明の思想に適せず、所以に道德と衝突し政治と衝突し、哲學と衝突し、文學と衝突したるにあらずや、是れ法華經を讀みろこねたるにあらずして何ぞや、吾人が奴隷と排したるは意此にあるなり、

○聖人苟も以て國を彊くすべければ其故に法らず、苟も以て民を利すべければ其禮に循はずとは商鞅の格言、道德は時と處とに由て變異す、とは東西學者の一致する所なり、法華經の解釋、古人の糟粕のみを眠りて甘ずべきものならんや、必ずや時代精神の趨向を酌量せざるべからず、所以に宗教の五綱あり、

○古人の言教を信用し、古人の精神を享受して、更に新しき精神を作り新しき思想を支配す、溫古知新は學門の要なり、是れ學門の奴隷となりたるにあらずして、學門の主義精神を了解体得して、之を應用したる者なり、

○書を讀みて古人の思想内に彷徨して出る能はず、昔の思想

を以て現代の思想と、矢鱈に衝突す、是れ學門の奴隷なり、

○小說を讀て、實際の事實の如く思ふは、小說なるものを知らざる無學愚者が、小說の奴隷となりたるなり、

○法華經を讀で、觀音、普賢、鬼子母神、四天王、上行菩薩釋迦如來等を別勸請するは、法華經の敎相だも見へざる近視眼者が、法華經の奴隷となりたるなり、

○法華經の修行に聲をからして、讀誦を專にする暗者は、文を守て奴隷たり、

○法華經を讀で、信者の心を正直にし、智者になることを敎へずして、矢鱈に現世の利益を說くは、信者を愚にするものにして、同く守文の奴隷なり

○法華經を讀で、本迹論、權實論のみを以て解釋するの外其他を見出さゝるもの、敎相に固執して觀心を知らざるもの、折伏行とし云へば、必ず罵詈惡口すべきものと意得る者、理性を失ひて理非を顧みず、固執强きを以て得々として大信仰家と誇る者、此等は法華經の奴隷にして、法華經を應用し能はざるものなり、

○法華經を應用し能はざるは、法華經を學びそこねて誤解し、不消化の爲めに煩悶し、束縛せられて解脫する能はず、形式を捕へて精神を逸したる者なり本を忘れて末に走るは法華經主義にあらず、

○以上は奴隷の粗なる者を擧ぐ、若夫れ細密に指摘し來らば殆ど其醜陋に堪へざるべし、法華經主義豈に斯の如きものならん哉

○心に法華經を研究し、信念し、肝銘し、感謝し、記憶し、身に法華經を實行し、顯示し、口に法華經を唱道し、誘話す、之を稱して如說修行と謂ひ、此行者の元氣を日蓮魂と謂ひ、此を敎へたるは如來の大慈悲にして、此三者の發展薰化の方針を法華經主義と謂ふ、

○宇宙の眞理を体達し、社會の實相を達觀し、人生の眞意義を悟了し、天地の大道を通して、無限絕待に入らんと欲する者は法華經主義なり、

○更に無限絕待の眞理より源流し、社會の實相を整理して、人生てふものに眞個の意味眞面目の光明を與へ、活潑愉快ならしめんと欲する者は法華經主義なり、

○宇宙各方面の眞、善、美を成るべく多量に、成るべく多方面に發揮せしめんと欲するものは法華經主義なり、

○人心の堂奧に突き入て、精神の根底より誠實なる信仰を喚起し、敎育、道德、倫理に對して、根底より力を與る者は、法華經主義なり、

○宗敎信仰を以て物質、精神二方面の文明を援る者は、法華經主義なり、

○宗敎信仰ありて文學、科學、哲學等の發達を助成するものは法華經主義なり、

○『予辱クモ大乘ヲ學ブ蒼繩驥尾ニ附テ千里ヲ走リ碧蘿松頭ニ懸リテ千仞ヲ伸ブ佛子佛法ノ衰退ヲ豈ニ愛惜ノ心ヲ起サヾランヤ』是法華經主義なり、

○「日蓮明日佐渡ノ國ヘマカル今夜ノサムキニ付テモロウノウチノアリサマ思ヤラレイタハシクコソ候ヘ」。嗚呼自身の謫流てふ大迫害をも打忘れて弟子の艱苦を思ひやる大仁恕の御精神、溫ふして而かも溢るゝが如き大人情、日朗たるもの籠內に餓死すとも、何の恨る所あらんや、又云く『籠ヲハシ出サセ給候ハヾトク〳〵キタリ給ヘ見タテマツリ見ヘタテマツラン恐々謹言』と、人は情的動物なり、此御文章を見て感泣せざるものやある、魏徵歌はずや「人生感意氣、功名誰亦論」と人情の極致は、法華經主義なり、

○『法華經ヲ餘人ノヨミ候ハ口ハカリコトババカリハヨメド、心ハヨマズ心ニヨメドモ身ニヨマス色心二法共ニアンバサレタルコソ貴ク候ヘ』豈に啻に法華經の修行のみならんや、身口意の三業、色心の二法相應せざるものを、自家瞞着の行爲と云ふ、世に敎育家なる者あり、心に倫理學を辨へ、口に道德說を敎へて、身に敎科書事件を惹起す、是をしも自家瞞着と云はずして何ぞ、嗚呼社會全体の罪と明めて泣寢入りはすべきは、明治の歷史か、有ゆる稱贊を以て編せらるゝに拘らず、敎育界にのみ此汚點を遺すゝ豈に遺憾の極みならずや希くは彼等に信仰を敎へたし、而して吾人は彼等と社會とに向て大懺悔を要求す、是れ社會をして聖賢の道に入らしむる最良法なり、蓋し倫理道德の實行に三業必ず相應するを得ば是れ聖人なり、況や其上に法華の修行を企つるに於てをや、人をして感く聖人ならしむるは、法華經主義なり

○「我大願ヲ立テン日本國ノ位ヲ讓ラン觀經等ニ付テ後生ヲ期セヨ父母ノ頭ヲハネン念佛申サズバナンドノ大難出來すとも智者に我義破ラレズバ用ヰザトナリ其外ノ大難風ノ前ノ塵ナルベシ我日本ノ柱トナラン我日本ノ大船トナラン我日本ノ眼目トナラント誓ヒシ願破ルベカラズ」日本古來の各宗の大高僧連、此堂々たる大識見の前に來て、顏色なきものあるや否や、古今東西の偉人傑士此の大確信に比して、遜色なきものあるや否や、是れ法華經主義の大感化なり

○『天晴タレバ地明ナリ法華ヲ識ル者ハ世法ヲ得可キ歟』宗敎の信仰は悄極的にのみ沈むべからず、又大に積極的なるべきなり、聰明英智にして、古今東西の學術技藝に精通し、時代精神を支配して一代の師表となるは法華經主義なり、

○『妙トハ蘇生の義ナリ』。死したる者を活し、眠れる者を覺醒し、惰夫を起たしめ愚人を諭し、不信に信仰を與へ、煩悶に慰藉を與へ、病者に藥を與へ、苦しむものと勞する者とに安樂と娛遊とを與へ、人に魄を與へ、人生に目的を與へ、國家に治安を與へ、社會に平和と進步とを與る者は、法華經主義なり、

○『人ノ壽命ハ無常ナリ出ル息入ル息ヲ待ツコトナシ風ノ前ノ灯ビナホ譬ヘニアラズ、乃至サレバ臨終ノ事ヲ習フテ後他事ヲ習フベシ』人は賢愚老少先づ未來の安心を固むるを要す未來の安心決定して世に咲き出づ、餓の夜嵐に吹き散るも、泰然自若として近くを得べし、豈に花々しからずや是を法華經主義と云ふ、

○『今フハ人ノ身ノ上明ハ我身ノ上ナレバ』因果、生死、浮沈、榮枯、盛衰、苦樂の車に廻り廻りて、何れ我家の門にも來るべし、其時喜怒哀樂と悶くとも最早や詮なかるべし、されば莊子云はずや『葬蒼に適く者は宿に糧を舂く、千里に適く者は三月糧聚む』と、人には必ず未來あり、明日も未來なり、來年も未來なり、更に、死後果して未來なしと言ひ得るか、汝は小なる未來を知りて大なる未來を知らず、近き未來を知りて遠き未來を知らず、何ぞ近視の甚しきや、明日も起出でゝ働かんとするの人明日の支度をせよ、來年も活て居らんとするの人來年の準備をせよ、更に死後の未來へ行かんとするの人大に準備せざるべからず、大に資糧を舂き且つ聚めざるべからず、諸君氣付がずや 今日の文明は、過去に於ける健全なる未來思想より生れ出でたるものなることを、又た氣付かずや吾人に生活欲あるは 未來を希求するの思想なることを、是を以て思ふ、吾人の未來思想なる者は、人類心靈の必然的傾向にして、他より敎へられたるにあらざる本來具有の精神作用なり、されば人類は、唯だ未來てふ者より、多大なる希望と安心と慰藉と確信とを得たり 世界中有用にして貴き者多しと雖も、豈に之に過るものあらんや 翼くは吾人は唯だ、未來の成功を期して、今身より佛身に至るまで、一時一刻も努め〳〵油斷なく進まば、遂に靈鷲山頂丁々たる百尺の松ケ枝に、千代萬代と奏る微妙の音樂に、清淨の耳を澄すを得るは、是れ法華經主義の優なり、

○『鳥ハ鳴ケドモ涙ハ出デズ日蓮ハ泣カネドモ涙暇ナシ』詩人は涙を愛し、宗敎家は涙を吝まず、社會は涙の濕ひに依て生長す、人類に涙からんか、墨々たる砂礫に均しからん、貴きは涙なり、涙は法華經主義の泉なり、

○『朝顏の花ひと時もちとせ經る松にかはらぬ心とゆかな』人に能不能あり、各其天職に安じて天命に任するは、法華經主義の粹なり、

○『たち渡る身のうき雲もはれぬべしたへぬみ法の鷲の山風』聖人の胸中常に、秋の空の澄み渡りたるが如く、平和晏如として我此土安穩の境界に遊び眞美の風光に接す、法華經主義に入ればなり、

○『門にたち物乞ふ人のこえきかばわはれと思へほどこさずとも』仁愛慈悲、入て情緒の琴線に觸れば、斯の如き音を發す、法華經主義の聲なり、

○『何レノ御門徒ナリトモ高祖ノ御書ニ改悔在テ弘通之レアラバ隨身致セ』公平なるに思想は、遂に我執固陋に打勝て、統一の公印となる、法華經主義を奉する者斯の如し、

○復古か、統一か、進歩か、改革か、自由か、吾人是を知らず、吾人は唯だ法華經主義あるのみ、

春の半日

窪田孤松子

（其門出）

◎敢て梅花の香薫に浮動せられたるにもあらず、又吟懷の勃々として抑ゆべからざるにもあらず、日々宗學院の學科に頭を疲しめたる我、半日の清遊を試みて心裡の苦悶を忘れ、一層修養の度を高めんと之を松尾忍水に謀る、彼も又我と同じく感ずるにや、唯々諾々として之に應ず、而かも去月廿五日の午後一時、互ひに手を携さへて門を出るや、二人の双眸に映するものは畫の如き品海の光景、白帆縱横滬舟漁船入るもの出るもの、正に之れ一輪の好活畫、而して我等も又畫中の人、少時は實に醉るもの、如し、我は此美觀に動かされて賦吟を吐けば、彼は直ちに之に應ず、

眞帆片帆繁き出入や春の海　孤松子

梅か香や船人までが醉ふたらし　忍水

（義士の塚）

◎歩を轉じて品川の東端入ヶ山に至り、馬車を驛りて泉岳寺の門前に着す、此寺は德川家康の創建する處にして、廣内三ヶ寺の一なる曹洞宗の巨刹なり、二人は先つ義士の墳墓を訪はんと、山門を入り左折すれば瑞鳳梅と名くる、最とも古雅なる梅樹あり、之れ長短公後室の愛翫したるものなりと、而して其後方に力蝋梅と名くる一株あり、大石眞金此樹下に自刀せりと傳ふ、之より少しく上れば右に首洗ひ井あり、吉眞義英の首を洗ひたる古跡ならん、之に隣して義商天野屋利兵衛の碑あり、更に上つて廟門に至れば、老翁の拜觀料を請求するに遇ふ、而かも大敎金五厘なり、忍水我を顧みて何事をか意語す、此爾者喧囂の間、感慨果して如何なるものぞ、門を入りて我等の視線を來るものは、長短公と其後室の廟なりとす、嗚呼之れ當年播州赤穗の城主、而して至誠忠烈なる四十七士と出す、蓋し其武其雄想ふべし、之に並びて石槨を築き圍めるもの、則ち不朽の英氣を懷きて睡れる、四十七義士の芳骸を葬れる墳域なり、霽の日も風の日も香煙ぱ繚々として、二百餘年の今尙絶へず、訪ふ人をしてそゞろに昔を思ばしむ、我等二人は心に妙法を念じて、忠あり義ある彼の四十七士を弔ふ、さぞや彼等の忠魂義魄は二人の手向を首肯して受けたるなるべし

此梅に問ひたや義士の男振り　忍水

梅の花害このかたの匂ひかな　孤松子

我等は此墓邊を去らんとするも 實に何等かの感にうたれて去る能はざりし、然れども強て歩みを運びて門へ出でゝ、觀覽券を求めて義士の遺物を見んと、其陣列場に至り券を受附に渡して場内に入れば 階下階上ば書畫刀劍を始めとし鎧兜陣太鼓弓箭采配繪卷軸、一として當時の紀念ならざるはなく、就中我等の目を惹しは堀部等の筆の跡、酒屋の看板細毛商の札 雨露に晒され僅かに字形を認むるも、運筆の妙文字の雅味實に敬服の外なかりき、其他幾百の數あるも茲に盡すに堪へし、二人は泉岳寺を辭して歸途に就かんとす、然るに忍水は更に增上寺を見んことを唱ふ、故に再び馬車に乘じて其方向に走る、

（增上寺）

◎此寺の緣起は茲に語るの要なし、唯だ宏壯なる靈塔の丹青は、實に燦然たりと謂はゝ足らん、而して其寺四の廣濶なる、東都無比と謂ふも誣るに非す、此日や故 小松宮殿下の御追悼を奉修せりとか、青衣黃袍の入道輩右往左往するを見受たり、而して彼等所儲の數義そのものゝ、正邪ば姑らく謂はずもがな唯だ至誠此の法會を勤む其志や實するに足る、二人は相前後し山内を周遊して芝公園を過ぎり正に歸らんとす、此の間に於て一句を得たり、

鶯も亦法華經と歌ひけり　孤松子

金堂や雪消へ殘る木立影　忍水

（天理敎）

◎之より急歩して金杉橋に出て馬車に乗らんと、不習不慣の間に道を迷れり、思ひきや二人の耳に達するものは、風のして來る音樂の響きと、いとも嬉しの唱歌の妙調、彼は聽じ我は動ぜり、而して其妙音に誘られて、途に二人は其歌樂にあこがるゝの人となり、之を尋ね求むれば黒煙々たる神道天理教支部なり、頗る大なる榜示をかけらる、我は餘りの案外なるに驚きぬ、忍水も又驚らん、されど淫祠とは謂ふものゝ、多少ト層社會に勢力を持てるもの、亦參考研究の材料にもと、二人は同じき感念のもとに、先つ其樣式を窺ほんものと、進んで其場内に入りて之を見れば、天理王を祭れる其前に、黒の塗鉢の三ツ紋附に赤き袴を穿てる三人の女、中なるは姥櫻の頃も過たる老女にて、左右なるは二七前後の花嬢、一つとやの數へ歌の樂に合したる調子につれ、双手を上下して舞へる樣の、冷笑せる二人にすら何等かの、感應を感覚せしむるものゝ如し、まして確信なき愚婦愚夫には、彼等が掌理に奔ばるゝに至る、敢て怪むべきにはあらず、由來宗教なるものは小理屈を以て築かれたる、乾燥無味なるものにあらず、其樣式に於ては或程度までは、教家の研究すべき價値あるを思へり、二人は可笑さを忍びて聞つゝありしも、途に堪へ難きに至れるを以て、無言の中に袖を引きて門外に出で、映笑一番其苦みを免かれたり、忍水は一句を吟じ我又之に應ぜり、

袖たもと乙女は蝶の戯れかな　忍水
拜む事教ゆる乳母や雛祭　孤松子

（東海寺）

月は四山に近づけり金杉橋に出で、二人は馬車に飛乘りて品川に着す、然れども遺憾尚存せり健脚の忍水東海寺に往き、澤庵禪師の墓を見んことを求む、故に道々彼の御殿山に探りて、澤庵の墳墓に至る時は暮靄樹間に充つ、漸やくにして其墓處に至れるも、敢て筆するの事なし、唯彼が墓は名詮自称とや謂ひんか、頗る大なる石を畳き棚を以て之を圍む、恰かも澤庵流の孤し石の如し、而して彼れ地中に得々たるや如何、我は之を知らざるなり、

春寒し石に昔の物語り　孤松子
澤庵の墓に得顔や歎冬花　忍水

森に響く入相の鐘は、二人に歸院を促がすに似たり、いざや歸りを急がんかなと、相語り歩を爭ふて歸院したりしは、點燈机上を照すの時なりき、而して此中日の清遊、其道程は約五里にして、實に感じたるもの少しとせず、今之を詳密に筆せん歟、其趣味を解せざるの徒は、貧文字を以て之に擬せんとす、獨子教ゆべからず、暫らく書して更に他日を期せんのみ、（完）

來者不拒

備前　七里法華法戰記

△△△一ヶ村全部改宗して本宗に歸す▽▽▽

影山謙二

『顯本退治佛教大演說會』、と時代遅れの耿法螺廣告を帖り廻はしたる處は備前赤磐郡葛城村にして、辨士は吉備の一致派に其人(?)ありと知る人は知る矢吹の僧都日廣の師となむ云える僧にて、うも事の起りは何によと索ぬるに、備前岡山の須山茂三郎氏(昨年吾か顯本法華宗に歸依したる人)は、其生家なる前記葛城村大字『田戸』佐藤春藏氏(茂三郎の實兄)に勸むるに從來其家の世襲なる一致派の背祖異教なること隨て迷に吾か顯本法華宗の正義に歸依すべきことを以てしたれども元來佐藤氏は温厚篤實の性にて德望一鄉に高き人なれば、氏の進退は實に地方圏衆の進退に繫ることなるのみならず、其檀那寺たる圓立寺の經濟及び經營に多大の影響を及ぼし、自然同寺の存廢にも關る大問題なればとて、至誠外護心の强盛なる氏は素より輕忽に去就を決せざりしが、過般須山氏は岡

山本行寺なる我が能仁事一師を請ふて同道し、俱に佐藤氏の許に往き、同師より一致派の邪義を點々指斥して玉石の異同を辨じ且つ捨邪歸正は、信仰の發足點に於ける須要の先決問題にして佛祖の嚴誨なること、並に邪義に耽けれる宗派に外護を捧げむよりは寧ろ正統正義の宗派に信念を捧げ外護を致してこそ始めて聖祖至孝の信徒と謂ふべきなりと諄々諭されしかば、佐藤氏の一家を始め並み居し親屬同門一統の人々何れも捨邪歸正の道念を發し、卒に即日、八名各々袂を連ねて從來の一致派を捨て圓立寺を離檀して本行寺の檀籍に加入したり、茲に於て圓立寺は周章狼狽措く所を知らず、終に其本山なる岡山の蓮昌寺に具狀して回復策を講求せしかば、蓮昌寺は右の矢吹氏に依囑して前記の如き標題の下に演說を開始することとはなりし也、

圓立寺にて開演せらるゝ這の廣告辻びらを一見したる新來の信徒佐藤氏等、何ん條以て默過すべき、直に之を須山氏に報し、須山氏は重立ちたる岡山信徒に謀りて竟に東京高等宗學院在留中なる能仁師に急電を打して歸岡を促し　師の歸岡を待て謀議を一決し　いよ〳〵信徒の馳せ集れる者四十餘名打ち擧り師を擁して、矢吹氏の演說所(道程約六里)指して進發したり、

予は作州に在て斯る法論のあるへしとは神佛ならぬ身の夢にだも前知せざりしが、能仁師より電報を傾し又續て三田常次郎氏が師の旨を啣で自轉車を軋らせつゝ勇ましく飛來するに會ひ、卒忽として家を出て津山にて林伊平妹尾正一郎氏等の急に赴くに遇ひ、偕に手を挙ゐて津山發午后一時三十分の列車に投したるに、二月廿七日にてありし、

野々口驛にて滊車を下り、川を渡り山を輪ゐ畦道を辿りつゝ人車も通はぬ谷間を傳ふか如く縫ふが如くにして約一里餘の道を凌て圓立寺に到れば、矢吹氏の演說眞最中にて、場中既に能仁師を始め岡山　大久保、白石等の信徒の詰め掛け、自他の聽衆數百人相混して待ち居るを見たり、當下、能仁師はヤオラ身を起して矢吹氏の檀上近く進み寄り『顯本退治の演說と云はる以上は、現に此處に吾が道俗共に參り居れば見事此の場にて問答なして勝敗を決せむ如何にや』と挑まれしかば、矢吹氏は『問答は好まず予は唯た蓮昌寺の嘱托より由りて予の意見を述ふるなり』とて應せず、さればとて能仁師は更に『各々時間を限て交替に立會演說を爲して邪正を論決せむ』と挑せられしも矢吹氏は理不尽にも不作法にも『此の圓立寺の道場は本山蓮昌寺の許諾を得るにあらされは縱ひ寸分間なりとも貸與せられず』と頓辭を搆ゐ名を本山に託して應する色なきより、能仁師は更に一段と語氣を强ふして『こは奇怪なり、念佛禪律等の如き權門の徒輩に此の道場を貸さとと言はるゝならは卒ゞ知らず、同じく日蓮聖祖の門下にて共に法の事を論究する上に於て道場を貸さじ杯とは異体同心水魚至交の祖訓に違ふのみならず單に一片私交の上より見るだにも去る不作法理不盡の計ひあるべき筈のものにあらず』と詰じられしも、矢吹師は『何と言はるゝとも自分の計ひに參らぬ事なり』とて兎角能仁師始め多數のわが信徒の馳せ參じたる氣勢に稍や怯じ氣のつきたるにや、氣の毒にも其度を失ひて始終の辨論も濕りがちにて頓と氣焰も揚らず唯だ聲を嗄らして僅に別勸請論の附會理窟を繰り返ゐして本宗の非別勸請論に反對なりとの趣意を一天張りに主張するものから、わが

信徒は、矢吹氏に於て問答にも立會演說にも應せずとなれば最早是れ迄なりと、場の四隅各方より交々質問の矢を放ちて追究せしかば、場中自他相和して自然に喧騷を極めさ乍ら職場に在るの思して、我々信徒は一に與衆の靜肅なるべき樣制止に盡力したるも多數聽衆の爭で聽くべき、折柄警察官は之を聞き着けて馳せ來り、遂に其日の演說を中止すべく命したるぞ是非もなき。

茲に於て我等は、是れより引き取り早速に佐藤泰藏氏の居宅にて駁擊演說を開會すべきに就き、引續き來聽あれかしと一同の聽衆に告げて圓立寺を退き佐藤氏方へ引揚げたり、夫れより即刻豫て設備し置きける裝置の演壇に立ちて能仁師、吉田岩次郎氏、影山謙二、各々一致派の雜亂せる勸請の邪義なることを糾彈して、矢吹氏か曲論附會の邪說を說破したり當下の聽衆は圓立寺の後ゲェ殆んど全部にして實に田戸の山岳も爲めに鳴動したり、殊に場中、殊勝にも或る一青年が隨喜の餘りにや、演說の句々を筆記し居たりしが、演說後、能仁師の前に進て種々と質問して慈敎を聽きて曰く『自分は葛城村大字川高、矢鍋右馬次と云ふる者なるが、自分の居村にも一致派の寺院ありて常に見るに耐ゐぬ事のみ多かれば歸後大に住職に談論すべし』と勵み居るを見受けたり、嗚好青年幸に宗門の爲め國家の爲めに健在なれ

演說畢れば時計既に十時三十分を報じぬ、他地方より參集したる我か信徒四十餘名、田戸の新信徒數名、合せて五十有餘名の信男女、中にも岡山より婦人の身もて能く男子に隨伴したる、吉田岩次郎、三田常次郎二君の雷助堂は、さすが女性の細ぎやかに佐藤氏一族の婦人と共に勝手元にて嘻々として打ち語らひつゝ相助けて、多數の勝部調度の事に當りし杯、異体同心水魚の思ひにて一見實に十年の交りにも越ゐたらむが如く、其間の情致、信交の樣、得も言はれぬ情趣を湛えし、さて配膳後　能仁師　林伊平氏、吉田岩次郎氏、影山謙二等の席上演說ありて和氣靄靄の間に、又翌日の作戰方針を議決し、乃ち今一應、矢吹氏に向て問答開始の交涉を爲すべく交涉委員五名（宇垣卯三郎、林伊平、佐藤清作、須山茂三郎、影山謙二）を指定し、一方には臨時に我か派の大演說を開催する事故、道路布敎兼廣告隊（吉田岩次郎、三田常次郎板野政治郎其他青年信徒五名）を編成して、各自分担の方面を如法に活動すべく責任を定めて一同臥床に就きぬ、

明けて二十八日午前八時より道路布敎の一隊は『顯本法華宗道路布敎隊』と大書せる一旋の白旗を押し樹て隊員一齊に折伏破權の進軍歌を奏しつゝ、又辻ビラ廣告紙をも所々に帖付すべく用意して、近村凡そ一里以內の村々に廻演せむと立出たり、一面また、交涉委員は、前日既に同道したりし岡山縣廳の速記者小倉悟四郎氏同伴にて例の圓立寺に到り矢吹氏に面會して備さに交涉の次第を談したるも　氏は飽く迄も問答を嫌ひ、立會演說を厭ふて之れに應せず、仍て我々交涉委員は、氏に向て數十箇條の難條を提して之れか質問を試みたり、今速記錄中より要を摘て概述せむに（交）足下既に顯本退治の爲に演說を開くと云ふ、然らは何ろ速に問答の上に於て勝敗を一期に決せざる（矢）予は唯た蓮昌寺の囑托に由て顯本法華宗の宗義に反對する箇條に關して予の意見を演述すれば足る、問答の如きは素より予の好まざる處なり（交）然らは更に問はむ、抑も顯本退治云々の廣告は足下指揮の下に出したりや（矢）此は予の關知せざる處なり（交）縱ひ足下の關知せざる處とするも廣告文面中に足下の名義を明記せる以上は世人は一般に足下の旨に出たるものと推定すべければ此不穩當極まれる廣字面に對する足下の責任は到底免る可からざるべし足下以て如何と爲す（矢）予は平素より本多日生師の唱道せらるゝ統一主義には大贊成と表する一人にて昨年宗徒大會の決定せし統一期成同盟會に對しても既に二十金を義出したる位なれば予に於て斯る不穩當なる廣告を爲すの素意なし、唯た當山の信徒が勝手に取り計ひたる事なれば幸に之を諒とせられ此上追究せられざる樣希望す（交）文字の出處に就ては最早此上追究せざるべし、然れとも、方今天下統一論に傾ける這の氣運に際し斯る廣告ありては世人の惑ひを惹き起し自然統一の成立を妨くるの虞れあり、足下は何を以て此の世惑を解くや（矢）されば勸請論の點に就て貴宗と意見を異にするのみにて、其他の點に於ては全く貴宗に贊成する者なり、仍て此の點に就てのみ顯木派を攻擊する者なりと演壇に登るの初めに於て每に聽衆に誡告し居れり尙ほ今日以后も屹度此の點を明確に警告すべし（交）足下、勸請論に於て異見を抱持すと云ふ、然らは先づ問はむ抑も宗義學上に於ける勸請の定義如何（矢）粗請とは本尊の內にあるものを別に立て然かして人の加護を祈るを云ふ（交）何を指して勸請と云ふや（矢）勸請とは稻荷妙見の如きを指して勸請と云ふ（交）此の寺の本堂の正面に祭れる所の禮拜の客体は何なりや（矢）是れは大曼荼羅なり（交）うの大曼荼羅を掛け奉れる裝置を名けて何と云ふや（矢）南無妙法蓮華經なり（交）足下の答は問旨に俟たらず我々の問は、大曼荼羅を裝置し奉れる圍周、接排、裝嚴、安

置の狀を名けて何と云ふやを尋ぬるに在れは、足下須らく是の問に對して具体的に明確なる答辨を與へらるへき也（矢）左樣なる事柄は今日是より演說の上に於て自然明瞭すへければ今此の席にて答ふふの必要を認めず、足下等宜しく后刻予が演說を聽かるへし、とて氏は直に法衣の袖を拂つて庫裡に馳け込みたり、アゝ惡れなる一致の僧　別勸請を以て直ちに勸請なりと答ゐ　大曼荼羅を安置し奉れる狀を名けて勸請と云はすして單に南無妙法蓮華經なりと言ひ、追問に逢ふては妄りに遁辭を殘して飛逃す、予は實に其無定見に驚きたり、莫遮、予等交涉委員は、わが派の演說開會の時間に迫りたれば一同圓立寺を辭して立ち歸れり、其時小倉速記者は　獨り留りて庫裡に入り、矢吹氏に對して『顯本派の人々に於て彼程に迄問答を桃發し居れば足下宜しく之れに應せられては如何縱し勝敗は附かざるにもせよ聽衆をして孰れか正　孰れか邪義なことを、問答を聽く間に自然と解悟せしめなば、惑ゐる信徒を救ふて二派孰れに歸依すへきかを決定せしむるの利益あるへし、予の如きは固より孰れにも屬せざる局外の者、單に貴下の身分を慮ひ　惑ゐる信徒の氣毒を念ふか故にのみ注告するなり』と言はれしと雖も、矢吹氏は飽迄も問答を避けて應せざりき、

夫れより午后一時、わが派は當日佐藤淸作氏の宅にて『顯本法華宗實義大演說會』を開き、

迷信の大害……林伊平
宗論交涉の顚末を述て憂宗愛國の志士に訴ふ……影山謙二
佛祖の殿試を調示す……能仁師

と、各其題下に十二分の廣長舌を暢べたりけるか、當下の聽衆は、田戸は言はずもがな、隣邑なる大鹿、國ヶ原外數ヶ村

より來りたるもの多く、蓋し聞法の利益大なりと想はれたり、

おはつて午后六時、信徒一同は佐藤氏等の一族に歡送せられて、佐藤清作氏の門さきより一葉の川舟を流しつゝ歸途に就く、田戸の連山脈長く、峯高く、旭川長汐に流れ清く四顧の眺望轉た　聖祖が『うしろには青山峨々として松風常樂我淨を奏し、前には碧水湯々として岸うつ波四德彼羅密を響かす』と謠はれしを懷ひ出しては又一層の感慨を加へつ、さて此邊一帶の地は一致派の最も盛なる處にて、世に『川流れ七里法華とさゝ稱ふるなり』舟中、興大に起りて時の移るを覺えず、凱歌を奏しつゝ舟の岡山鵜見橋下に着きたるは夜すでに九時なりし、越へて三月二日、田戸佐藤春藏氏よりの飛報本行寺に着す、曰く『田戸一村全部一も殘りなく愈々わか顯本法華宗に歸し、既に御本尊開眼の式も不取敢自分に於て臨時貴師に代りて執行したり』と、又曰く『大鹿、國ケ原等の各所へも漸次布教開演の準備を爲すへし』と、嗟呼、正義の旗翻る處必らず正義の信徒起る、喜はしき哉一天四海皆歸妙法の前途、

統一團報

京都通信（第二信）

在京都　白藤生

拜啓

連々春暖に相向ひ彼岸會も間近く相成候、麗かなる日の光に、四方の山々も雪の外套を脱ぎ捨てゝ、流るゝ小川の邊には柳の糸のそよ風に吹かるゝ時節と相成申候。元來春てふものは何か非常に希望に充ちゝて心地好く、春陽の氣候と青年の元氣とは好一對にして、眞に愉快に感せらるゝものに候、

偖て京都の教界は近頃さしたることも無之至極無事に候、二月中は唯だ、京極に於て、關西佛教青年會の催にかゝる佛教演說有之、南條文雄博士、近角常觀氏等出演致候、本月に入りては基督教に於て、彼の昨年河内に於て開かれたる萬國宗教大會の會長、米國神學博士ホール氏來りて壹週間程比較宗教の講演有之候、

我本山妙蓮寺に於ては、去月の十八、十九の兩日は、例月の演說會にして十八日は午后六時半頃より開會、

綱さ綱　木村義明師
如來の大慈悲　銀井乾升師
耶の一念三千の實珠　長尾榮進師
積惡成佛　中村寛澄師
法華經に同化せよ（上）　白井日照師

にして此夜飛雪紛々、寒氣堪へ難き程なりしも、聽衆五十餘名あり、十九日は本化中央青年會の名目にて開會し

開會の辭　幹事　銀井乾升師
信仰とは誠實なる依頼なり　木村義明師
情の日蓮聖人　綱脇龍妙師
演題未詳　三好圓智師
如說修行　大西行學師
法華經に同化せよ（下）　白井日照師

聽衆六拾餘名皆な熱心に聞き居候、同日共「法の鼓」（第三號）を編本致候、

隨喜觀教會は廿五日夜高辻通東洞院久遠寺に於て勤修被致候、銀井氏と小生とは白井上人に隨行して出張致候、住職坪永日監師の誠實熱心なる、準備能く行屆き候ひし爲め、當夜は雨天なりしにも拘らず、聽衆思ひの外多く來り候當寺近邊の者は皆な六條信者なるにも拘らず、白井上人の懇切にして熱心なる說教に感ぜざる者なし、說教の終結に白井上人の導師にて、聽衆皆な異口同音に、御題目を丁寧に二十遍計りと、受持又を唱へたるは、等雨法雨多大にして誠に心地好く感じ申候、一席の說教能く人心を動かしたる法益に至ては、小生等の白井上人或は坪永師の勞に向て深く感謝する所に御座候、散開の節「法の鼓」（第三

號）を編本致候、

本山方丈も本月に入りては大法會の準備等にて每日忙く候、

京都市中も　大阪博覽會の餘響を受けて幾分か活氣を帶ひ來り候、且又た四月の花見時も、間近く相成候事とて、旅宿屋始め凡ての商人等は、京都の收獲期、一年中の稼もふけ、時こそ御參なれと云はゞ計りに、壯者は腕によりを掛け、老人は眼鏡越しに算盤を撥き、名勝舊跡は掃除修繕等を始め、祇園の美人は衣裝の新調を急ぎ　鴨川筋には特別の裝飾を施さんと計畫し、皆な準備なき〳〵怠りなく候々敬具（三月十日）

●高等宗學院閑院式

府下南品川に於て開かれたる高等宗學院第壹回は本月一日を以て豫期の如く閑院式を擧行されたり、先づ午前八時御本尊の御前に新て講師小林大學林長導師として一同勤行を終り次で等く式に列し講師總代として錦織講師の辭あり

今回高等宗學院ヲ開設セラルヽヤ諸氏等教用多忙ナルニモ抱ラズ奮テ入學セラレ孜々研鑽ニ從事シ本日ヲ以テ學業終了ヲ告ゲ病等宗門ノ爲メ最モ慶賀ニ堪ヘズ今ヤ時勢ハ日一日トシテ宗義ノ發揚ヲ促シ來ル際ナレハ各自歸國ノ途ニ上ルモ樂ヲ廢セス益宗義ノ精要ヲ研キ且ツ大法宣傳ニ力ヲ盡シ宗門ノ爲メ偉大ナル貢獻アラレンヿヲ至囑ス

明治三十六年三月一日　講師總代　大僧正　錦織日航

右終りて院生總代として野老氏の答辭あり

維時明治三十六年三月一日高等宗學院閑院ノ式典ヲ擧行セラルヽニ允リ慇懃ナル厚規ヲ賜ヒ我等院生一同肝銘揮ク能ハサル處ナリ顧レハ講師諸先輩ノ此數旬間我等院生ヲ誘掖指導シ玉ヒシ恩ノモノ豈感佩セサルベケンヤ眞ニ南法充治芽再生ノ恩ヒアリ我等今行李ヲ收メテ各々任他ニ歸ラレトス自今益々修養ヲ加ヘ暫テ二利ノ圓滿ヲ戎辨センヿヲ期ス茲ニ聚ンテ答フ

明治三十六年三月一日　高等宗學院々生總代　野老乾爲敬白

次に學業結了者へは小林講師よりうれ〳〵終了證を授與せられ、茲に目出度式を終り。かくて別席に移りて設けの祝宴あり、本多講師の席上諭示あり次て散會し各々行李を收めて歸國の途に着きたり、

●高等宗學院同窓會　同會は閑院の日永く厚情を温むるの目的を以て、大橋朝倉成嶋松尾の諸氏發起となり、院生一同の賛成を得て之を組織したり、會長には野老乾爲氏を擁し、名譽會員には講師、錦織　小林、本多の三大僧正を戴きたる由也、以來本誌を以て報告を依頼したき旨申越しに對し本團は承諾の旨答へ置きたり

●高等宗學院隨喜參觀　開院中田中智學居士は隨喜參觀あり尚「敎行證御書」數十部を寄贈ありたり、又脇田堯惇師も見舞として來院あり、清水梁山師も又來院隨喜演說ありしと云ふ

●品川雜誌縱覽所　府下品川妙蓮寺主山根顯道師の設立に係る宗敎雜誌縱覽所は設立以來縱覽者も讀々あり好結果にして增益亦少からすと云ふ

●盛岡宗祖御會式に付　今回高等宗學院に來會されし渡邊元敎師は頗る護法心に篤き人なるが昨年も十一月十一日には大僧正本多日生上人を招待し明る十二日には盛なる宗祖御會式を執行し說敎等を催し參詣人は千人以上に及び十三日は通夜法要參詣凡五百人十四日には僧俗同信會の演說及懇親會を催し頗る盛大なりし由右は隨行久我默宗師の談話也

●岡山憤慨生の投書　あり曰く、予は水月五日の山陽新報の廣告欄に於て、奇怪なる文字を見出したり、「初午大會三月七日　舊二月九日　舊二月九日　當日に限り盜難よけの御守を授く云云　備中高松稲荷山」この文字にして、公然

新聞に廣告をするもの、心根はさて如何に、又之を怪まずして平然知らざるもの、如き、單稱日蓮宗の人々の片腹いたさよ、いかで悲むべき現下の狀態ぞや云云

寄贈新刊雜誌

改教時報　第九七、九八號　本郷　大日本佛教同盟會
日宗新報　第二六五、二六六、二六七號　池上　其　社
北友雜誌　第八三號　函館　其　社
妙好華　第三卷第二號　芝　清　堂　社
德風　第十三卷第二號　三河　其　館
ひろめ　第十八號　岡山　其　發行部
和融誌　第七卷第二號　麻布　其　社
愛信　第二卷第一、三號　麻布　其　社
慈善時報　第五號　福井　育　兒　院
師子吼新報　第十一號　遠谷　其　社
人圓新誌　第八、九號　豊後　其　社
教友雜誌　第四百十四、四百十五號　甲府　其　社
無盡燈　第八卷第三號　巣鴨　其　社
家庭　第三卷第三號　本郷　其　發行所
加持世界　第三卷第二號　小石川　其　社
妙宗　第六卷第二號　鎌倉　師子王文庫
三寶　第三卷十一、十二號　麻布　森江書店雜誌部
輪王　第十四號　芝　其　新聞社
新流行　第三年第一號　岡山　其　社
高輪學報　第十六號　芝　佛教大學
日本之柱　第一六號　大阪　立　正　社
幸福なる家庭　京都　法　藏　館
佛教行事十二月　仝　仝　館
東亞の光　第二號　神田　舍　身　庵
博愛　第一二〇號　甲斐　峡中博愛社
交の友　第二の四號　下谷　以　文　會
救濟新報　第八十八號　其　社
智識新報　第二十四號　芝　其　社
佛教教育　第三十七號　河波　其　會
大道叢誌　第一七六號　本郷　其　社
興隆月報　第十一號　京都　興　正　寺
二十世紀農報　第二號　大阪　植物試驗場
法藏　第一三八號　京都　法　藏　館
教鈴　第三の三號　巣鴨　佛　教　會
十善寶窟　第一五五輯　小石川　目白僧園

我大安心ヲ體得スルモノハ必然トシテ喜慶ノ心ヲ生シ歡喜ヲ以テ滿々サルヽニ至リ遂ニ殺戮ヲ好ミシ者モ大悲ノ心ヲ起シ嫉妬強カリシ者モ闘喜ノ心ヲ起シ愛着多カリシ者モ能捨ノ心ヲ起シ慳貪盛ナリシ者モ慈施ノ心ヲ起シ憍慢盛ナリシ者モ恬淡ノ心ヲ起シ嗔恚熾ナリシ者モ忍辱ノ心ヲ起シ懈怠ニ流レシ者モ精進ノ心ヲ起シ散乱ヲ好ミシ者モ靜慮ノ心ヲ起シ愚痴多カリシ者モ智慧ノ心ヲ起シ他愛無リシ者モ博愛ノ心ヲ起シ十惡ヲ行セシ者モ十善ノ心ヲ起シ有漏ヲ爲セシ者モ無漏ノ心ヲ起シ煩惱多キ者モ除滅ノ心ヲ起スニ至ラン（無量義經取意）

顯本之光

吾か家の安心

本立院日譽

人は皆安心をしたいとの希望があります、同しく安心をするにも僞の安心でなく、眞の安心を得るのか、眞實以て幸福であります、而して眞實の安心は、如何にして得らるゝかと云ふに、眞の御本尊に歸命し、南無妙法蓮華經と信念口唱するを以て、其の目的を達し得らるゝのであります、今之を詳論致しましやう

安心とは讀で字の如く、心を安ずるのである、話を替へて云へは自分の精神の歸着點が定まるを云ふのであります、故に其の人各々の精神狀態によつて、安心の程度に違か生ずるのである、兎に角、自己の第一義と認むるものによつて、精神不動となり、如何なる場合に接しても、第一義の爲には、何物をも犧牲に供するも辞せずとの覺悟あつて、始めて安心を得た人と申すのであります、

拜金宗によりて安心する人は、利益てふ觀念の前には義理も人情もありません、或る乏貧の人か拜金宗の名士に對して、如何にせは拜金宗の本尊の惠みを受けるとか出來ますかと問たのである、スルト其の名士の答で云ふのには　犬の如く片足を揚けて小便をせよとの、意外なる答辨であります、ソコデ貧乏人か謂らく、ソハ易きことなりとて　夫れよりは毎日々々犬の如く片足を上けて小便をしましたのであるけれども何の利益もなかつたのであります、蓋し名士の言は、一種の謎でありまして、利益てふ觀念の前には、眼中義理もなく人情もなく、世間の批評は空吹く風と聞き流し、宛も犬の如き根性になれとの謎であるのを、其の言葉にまようて、其の精神を實行しなかつたからであります

この拜金宗の安心は、精神狀態の極めて卑しむへきもので、偶ま疾病に罹るとあるも、醫藥を服するとさへ欲しないのである、或る拜金主義の人か、醫藥をも拒み、當に死せんとするとき、其の看護人か病者に對して、貴君はこの金を捨てゝ死せば　定めし殘念ならんと云ひしに、病者の曰く其の金は既に充分樂みたるかすなれば、惜ひに足らず　とて、瞑目したりうてある、要するに現世主義の現金主義で、人としてこの世に生れたる、自己の運命を金錢の奴隷となして安心するとは、馬鹿氣た話である

これより現世主義でも格段の進歩した名譽宗の安心者は、名譽の爲には、生命を捨つると飛て火に

入る夏の虫の如く、金錢を樂つると土芥の如く一意專心名譽の高からんとを欲するのである、虎は死して皮を留め人は死して名を留む、甚たしきは芳名を後世に殘す能はずんは寧ろ醜名を天下に流さん杯と云ふものもあるに至るのである

更に一轉して名利主義の安心は假の安心にして賴むに足らずとなし、元來人間夫れ自身の不完全なるを看破し、吾人の生命は無常なり、出る息は入る息を待たず、風の前の燈火よりもはかなし、吾人の境界は苦痛なり、快樂と思へるも夢の間にして直に苦痛となり、貪瞋痴の三毒心内を煩悶しめ、水火風の三災身外より迫り、徹頭徹尾苦痛ならざるはなし、吾人の運命は不自由なり、束縛を免れず、無始無終の時間内に僅に五十年、無際無限の空間内に五尺の短身、一舉手一投足、皆拘束を免れざるはなし、吾人の境界は不淨なり不潔なり、身心も國土も煩惱業苦に汚され、瓦石充滿せり斯の如き無常苦痛無我不淨の吾人の運命の中に處し、名譽何かあらん、利益何かせん、願くはこの不完全なる境界を解脫して、常住快樂自在淸淨の境界に安住せんとの、大希望を有するものにして、始めて眞の安心に到達するを得るのであります、本來常樂我淨の四德は吾人の一念に具するのでありますから、必ずこの境界を叩發するとか出來るのでありますけれども、木中の花を探るか如く、石中の火を見るか如く、自已の一念に向て觀念功風を凝らしましても、難行苦行のみで、骨折損の疲れもうけて、徹底安心するとか出來ません、基督の天帝の愛や西方彌陀の慈悲によりて救はれ、この境界に達するとか出來ると安心しましても、其れは僞の安心で、夢に長者となりたるも夢醒て、もとの貧民の如く、五十年の夢の安心は、臨終の后に天國に至るとも出來ず、西方安樂國へ生するとも、夢の樂みでありまして無益であります、何故であるかと云ふにこれらの宗敎は、事の一念三千の佛種かないからであります、

唯一、絕對、無限、普徧なる本佛果上修顯得体の常樂我淨の四德波羅密は、之を信受する一念に讓與くださるを事の一念三千の法門と申します、一念三千を知らざるものにもわれ佛陀に大慈悲を以て妙法蓮華經の本尊に、佛果起用の一念三千萬德をつゝみ給ふを以て、之を信ずれは直にこの功德を讓り與へ給ふのが、即ち一念三千の法門に叶ふのであります、自已の億想分別を離れ、眞の本尊即本門の大本尊に歸命し唯南無妙法蓮華經と信念日唱すれは、臨終を期して眞の靈山事の寂光土に往詣し、直に唯一本佛と同化するとは、如來眞實の敎訓であるして、天は地となり地は天となるとも、斷して虛安ありとはないのであります、故に我家の安心は、眞の安心にして、この安心を得たるものは、巨萬の富や世界の名譽と比するに雲泥の差あるのみならず、この安心の功德は、火も燒と能はず、水も漂すと能はず、三尺の秋水も之を

切ると能はず、天地を破壞する大广王も之を奪ふ能はず、眞實以て幸福なる安心であります、大火所燒時我此土安穩の功德も、この安心につゝまれ、慧光照無量壽命無數劫の本佛もこの、安心につゝまれるのであります

願くは世の迷へる拜金宗の徒、名譽宗の徒アーメン念佛眞言禪等の徒よ、自已の妄想分別を捨て行淺功深の南無妙法蓮華經を信せよ

この安心の前には何ものゝも犧牲に供するも敢て辭せざれ、國王の位何かあらん　生命何かあらん、況んや名利をやである、我は唯

南無妙法蓮華經と唱ふのであります

寂られぬ夜は

忍水

ねられぬ夜は何とせん
　千草の思ひかき集め
　　御佛のかげ拜まんか
ねんねこねんねん乳母うひ寢
　幽かに开をば思ひ出し
　　はとけ微妙の聲と聽き
よぎも蒲團も御佛の
　み袖の上のなさけぞと
　　斯して寢られぬ事やあるべき

日本之柱
主筆佐野貫孝毎月十五日發行
一部金五錢一年分前金五十錢
發行所　大坂市東區中寺町　立正社

敎友雜誌
主筆武田宜明　毎月二回發行
一部金五錢一年分金壹圓廿錢
發行所　甲府市稻門村　敎友社

北友雜誌
主筆松森靈運　毎月十八日發行
一部金五錢一年分金六十錢
發行所京東市小石川區白山大乘寺內　北友雜誌社施本部

輪王
主幹川合妙鏡毎月十五日發行
一部金一錢一年分金十二錢
發行所　東京芝二本榎一丁　輪王新聞社

ひろめ
編輯阿倍正尹當分毎月一回發
行一部金四錢五厘一年分金五十四
發行所　岡山市野田屋町四八番　ひろめ發行部

妙宗

毎月一回(六日)發行
一部金十錢郵税一錢
一ヶ年前金壹圓貳拾錢(郵税不要)

第六編　第叁號　三月二日發行

目次

●聖祖御靈跡寫眞　第卅二報
●宗門靈場　△駿河村松海長寺　△伊豆韮山本立寺

布教欄

●吾人の祈　(田中智學)
●全國各鐵道驛長諸君に乞ふ　(同)
●感謝す(本化宗學研究大會淨資義納に就て)
●報告す(本化宗學研究大會に對する種々の照會に就て)　(主筆)
●角いかな國(師子王頌言)　(田中智學)
●學問は形式にあらず　(保改智宙)
●聖傳略談(つゝき)　(山川智應)
●人格の修養　(同)
●井上巽軒に誨ふ

講義欄

●妙經如來壽量品偈講義　(田中智學口述)
●如說修行抄講義　(仝)

維篇欄

●故高山樗牛の遺骨葬むる辭　(田中智學)
●立正閣　(本兄子)

外數件

相模鎌倉要山

發行所　師子王文庫

和融誌

第七卷第三號　三月十日發行

定價金十錢　郵税一錢　一部金五錢　一ヶ年金壹圓(郵税共)　半ヶ年金十二錢

⊙世界的思想を發揮せよ　(梶川乾堂)
⊙宗教と美術との關係　(久保田米僊)
○蛙鳴雀噪の人類の進化　(忽滑谷快天)
○神と人としての道元禪師　(木村泰賢)
○詩人としての金一郎　(保坂滴水)
○面山禪師の性行と其時代　(佛子露影)
○佛教文學の地位　(折桂)
○教育の五家の門風　(淺野斧山)
○教育の普及を論ず　(松華陣人)
○怨魔研究一班　(本多文雄)
○采荏錄　(川村東村)
○碧巖集提唱　(大森知言)

東京麻布區曹洞宗大學
發行所　和融會本部
(電話新橋三三二〇)

雙榎學報

第壹號

既刊　附錄　日宗著述大目錄(類從索引)(イロハ索引附)

△攝折論　小林日薫
△三十年の記憶　脇田堯惇
△日本禪族と法華經　清水梁山
△日宗教理發展史論　武田宣明
△日宗教育沿革概論　小笠原日毅
△清澄山宗旨考　清水龍山
△宗教心論　中島泰藏
△唯物論を排す　文學博士　中嶋力藏

▲發行所　東京芝二本榎　日蓮宗大學林同窓會
▲發賣所　麻布飯倉　森江擁萬閣
▲賣捌所　芝三田四國町　岸田書店

定價　二十錢

破天荒の一大活斷
國民の必讀を要す

清水梁山先生著
日本國の祖先
(天下學者の批評を求む)

日本國史學上の新問題…世界の光たる日本國は此書に依りて始めて説明せらる

日本國の祖先は果して如何、愚儒や輕佻なる學究先生の古今の所説果して信ずべきか　吾等の大祖先に至誠の敬虔を致し奉らんと欲するものは、至誠に研究を積み奉らざるべからず　論旨は「日本國の祖先は印度靈山に於て釋迦牟尼に教化せられたる法華經の行者が釋迦牟尼の告勅を奉し遙に來りて特に此國土の經營を爲したる者なり」といふに在り、其立證の重なるは言語の上に於てせらる、更に著者が下せる下の斷案に聽け、曰く「日本皇室の祖神が直に是唯一久遠の釋迦牟尼なることを識らざるの徒は未だ日本國を解すること能はざる者なり」と(印刷實費金六錢)、郵税金二錢)

日宗新報

毎月三回發行
△壹部金五錢
△一ヶ年金壹圓六十錢

●日蓮大士眞實傳　▲代價金三十錢△郵税金四錢
●日蓮聖人勤王論　○代價金一錢▲郵税金五厘

東京府荏原郡池上村
發行所　日宗新報社

大阪大博覽會に付
顯本法華宗御僧侶信徒御指定宿廣告

來る三月一日より開會相成候第五回内國勸業博覽會に付出者諸各府縣の御用達仕る處今回大阪府本宗寺院總代清瀨貞雄殿溝口會旭殿信徒總代村上貞藏殿等より御宗指定宿所御勸誘に相成り宗務廳へ御許可願出候處今般成候出者に取りては

非常の名譽　に存候に付此際　大奮發を仕專ら

本宗御指定宿御許可　相

確實を旨とし如宗一般御繕素の

便宜安全を計り普通旅宿の遠く及ばざる叮嚀懇篤なる設備を爲し至極安價にて御待遇申上候次第に候又御宗内の方々と御同伴若くは其御照會の方々に限り同樣に御待遇申上候間陸續御光來の榮に預り度候

右に付借入設備の寺院左の如くに御座候

中寺町地藏阪北入東側　蓮成寺
同　西側　妙德寺
同　東側　本行寺
同　西側　藥王寺

右へ御入車祈上候

梅田及天王寺停車場へ弊店より出迎御案内仕候

但し停車場には(古川御用達出迎所)と特に大なる看板を掲け有之候

顯本法華宗御用達　古川吉平

顯本法華宗御僧侶信徒御中

尙委細の案内書は統一第九十四號を御覽被下度候

御雛人形
附そと小道具
武者人形
東羽子板
御注文に依り調製致候
東京日本橋通り十軒店
久月本店
中原福藏
（電話二千三百八十二番）

岡山市上之町
呉服卸
柿屋本店

柿屋 蒲團洋傘 店（岡山市上之町）
柿屋太物店（岡山市上之町）
呉服卸 柿屋南店（岡山市上之町）
呉服卸 柿屋上店（岡山市車町筋）
柿屋鼈甲店（岡山市中之町）

廣告

例年ノ通リ四月十一日ヨリ十五日迄五日間

大法會

修要 法要 回向 說教
演說 學義 施本

右執行候事

明治三十六年三月

京都寺町二條
總本山妙滿寺

告示

番外
本年三月一日より第五回内國勸業博覽會大阪市ニ於テ開催ニ付本宗僧侶檀信徒遊覽者ノ便宜安全ヲ計リ本宗指定宿所ヲ古川吉平ニ命シ其設備ヲ爲サシメ候條本宗僧侶檀信徒ハ隨意該指定宿所ニ宿泊スルコトヲ得ベシ

明治三十六年三月

顯本法華宗宗務廳

本團發行の法の皷を施本せよ、布教雜誌としては恰好のもの也、悉細廣告にあり

一本誌代金

不納の諸君は至急御送金ヲ乞

一雜誌交換・寄稿

共移轉先へ願升

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊八錢十二冊前金八十六錢廿四冊前金一圓七十錢郵券代用は一割増但五厘切手を其とす
一講讀申込の節は住所姓名を楷書にて認められべし
一爲替局は淺草區北松山町として御振り込の事
一本團は別に領收書を發せず但し領收證を要する向は返信料を封入するか或は爲替振込の節拂渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
一廣告料は五號活字廿七字詰毎一行金八錢なり

明治卅六年三月十五日印刷發行

發行人 井村恂也
編輯人 山根顯道
印刷人 鈴木暉學
印刷所 北澤活版所

東京市淺草區南松山町四十五番地
發行所 統一團

一統

第九十六號目要

◎勸信要義……本多日生
▲朝の師子吼……松尾忍水
◎日蓮門下各派比較評論……主筆
▲各宗側面觀……笹川篤堂
◎日蓮門徒の帝國主義……上田不新
▲妙乘旅行感慨記……影山謙二
◎法衣を着せる惡魔……窪田孤松
▲千葉の清興……紫山櫻水
◎日蓮大聖人……關田養叔
▲佛耶兩教の衝突……窪田孤松
◎須らく品性の修要に勉めよ……不新
▲倚門（忍水を送る）……山根駟道
◎人生の最大問題……

（明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可
（明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可
（全三十六年四月十五日發行統一第九十六號　毎月一回十五日）
東京市淺草區松山町四十五番地

大法主二位僧都日什大正師御遺文
前管長大僧正錦織日航師題字
大僧正　小林日至師
大僧正　本多日生師　編輯

本宗綱要

和裝頗美本
實價金三十五錢
郵稅不要

◎嘗て佛海の大波瀾を奔騰せしめたるものは本書なり
◎四箇格言問題を爆發せしめたる大主動者は本書なり
◎佛教各宗協會をして畏懼狼狽せしめたるは本書なり
◎綱要編纂委員の心膽を寒むからしめたるは本書なり
◎妙宗教義の神髄を發揮して組織的に系統的に詳細說述して餘蘊なきは本書なり
◎殊に四箇格言の一章を設け恐れず憚らず念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊諸宗無得道の旨を痛論して一種獨特の光彩を放てるは本書なり

讀め、須らく讀め、眞佛敎の眞意義を知らんと欲するものは自他宗の僧俗を問はず悉く本書を讀め、

東京市淺草區新谷町
發行所　顯本法華宗　宗務廳

施本

「法の鼓」

雜誌

本誌は頗る愛らしき小雜誌なり

本誌定價

一部　二錢
壹年ヶ前金　二十錢
十部以上　一錢五厘宛
五十部以上　一錢二厘宛

本誌には祖聞、說敎、小說、和歌等あり

今般統一團より本誌を毎月一回發行致し只の印刷費のみにてお求に應ずる事に致しましたから何卒篤志の御方は檀家又は知人へ施本用として御買求め下さい澤山印刷すれば其だけ價を割引ますから續々御注文を乞ふ

○今日の良布敎方法は
「法の鼓」を
施本するに限りません、小供でも婦人でも假名さへ讀める人は讀んで解る良雜誌

○施本には限らず本誌購讀方もお勸め下さい

東京淺草南松山町
統一團